

Newsletter

No. 1 January 2012

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

ご挨拶

チリ共和国は南米大陸の西側に位置し、東をアンデス山脈、西を南太平洋に挟まれた細長い国です。南北に伸びた国土には四季を通じて大自然の様々な表情を見ることができ、それらはチリの魅力の一つとなっています。一方、チリ共和国首都のサンティアゴは人口600万人が暮らす南米有数の大都市であり、近代的な高層建築が立ち並ぶ街並みと、その背景にそびえるアンデス山脈とが、美しくも独特なコントラストをかたちづいています。

日本から見ればほぼ地球の裏側に位置するチリに、2010年、東京医科歯科大学の南米における研究・活動拠点として、ラテンアメリカ共同研究拠点 (Latin American Collaborative Research Center: LACRC) がオープンしました。以来、私どもLACRCスタッフはサンティアゴを中心に、大腸癌を主な対象とした臨床・基礎研究活動に携わっており、将来的には共同研究を通じて他の中南米諸国へも連携の輪を広げて行ければと考えています。この度、LACRCの取り組みをはじめとして、チリの文化・風土なども、学内外の方々に広くご紹介させていただければと、LACRC発のニュースレターを創刊することとなりました。このニュースレターを通じ、LACRCの活動のみならず、チリという国を身近に感じていただければ幸いです。

編集に当たっては、「ブログにさっと目を通すように」気軽に楽しく読んでいただけるようなニュースレターを目指したいと考えています。今後の記事の充実のためにも、皆様からのご意見・ご感想を頂戴できれば幸いです。何卒よろしくお願い申し上げます。

伊藤 崇 LACRC 人体病理学分野



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
LACRCとは	2
東京医科歯科大学とチリ	3
活動報告	4
Staff (西蔭徹郎講師)	5
学生チリ体験記	6

LACRCとは

チリではこの10年間で大腸癌での死亡率が1.6倍まで増加しています。東京医科歯科大学は、この問題に取り組むチリ保健省、および同国を代表する私立病院であるクリニカ・ラス・コンデス(Clinica Las Condes: CLC)との間に、2009年7月、「大腸癌に関する臨床・科学・学術交流に関する協定」を締結しました。

チリでは、CLC、およびチリ保健省の主導で早期大腸癌集団検診プロジェクトが開始されることとなっており、本学はこのプロジェクトを学術的・技術的に支援していくこととなりました。

プロジェクトリーダーの江石教授とロペス医師 (CLC)



日本の医療・科学技術の輪を中南米諸国へ

2010年4月、CLC内に、ラテンアメリカ共同研究拠点 (Latin American Collaborative Research Center: LACRC) がオープンしました。LACRCは、本学がチリにおける早期大腸癌集団検診プロジェクトの支援をする場、またそれを通じて得られる試料や新たな課題等についてチリの研究機関と共同研究を行う場、さらには広く中南米諸国において教育・研究・国際貢献を展開・発信する場となります。同年8月に行われたLACRC開所式典には、大山喬史東京医科歯科大学長、レネ・テヒーアスCLC院長、ゴンサロ・グレーベ同CEOをはじめとして、在チリ日本大使館、JICAチリ支所、チリ保健省、チリ大学など、多様な組織から多くの来賓の方々が列席され、LACRCに対する期待がうかがわれるものとなりました。



現在のLACRCスタッフ (写真右より伊藤助教、西蔭講師、田中助教、四宮)



サン・ボルハ病院主催の学会にて (写真左より西蔭講師、伊藤助教)

2012年1月現在、LACRCには、本学のスタッフである内視鏡医2名(食道・一般外科学分野: 西蔭徹郎講師、同: 田中浩司助教)、病理医1名(人体病理学分野: 伊藤崇助教)が赴任しており、日本が世界に誇る内視鏡診断・治療技術や消化管病理診断技術の指導、現地の医師や研究者との共同研究に日々励んでいます。また、CLCからは専属の秘書1名(四宮里枝子)がLACRCスタッフの一員として配置され、業務のサポートにあたっています。さらに、2010年度からは、チリの最重要学府であるチリ大学との連携のもと、本学医学部4年生がプロジェクトセメスターの課程で、チリの実験室にて5カ月間の研究実習を行うことが可能となりました。現在、6名の学生が、CLC(3名)とチリ大学医学部の研究室(3名)において研究活動に従事しています。

東京医科歯科大学とチリ



1977年 胃癌診断センター設立の調印式（中央：村上忠重教授）



1986年に実施された国際消化器病研修会

40年以上におよぶラテンアメリカ医学界との 交流の上にLACRCが発足

LACRCの発足は、2010年とごく最近の出来事ですが、東京医科歯科大学とチリの医学交流には40年以上の歴史があります。

本学の故・村上忠重教授（第一外科学）が、初めてチリを訪問したのは1968年。そこで村上教授が行った日本における胃癌の診断と治療についての講演が評判を呼び、この訪問は、現地の医師たちが日本の医療技術に関心を抱き始めるきっかけとなりました。

その後、1970年代に入ると、チリでは、JICAによるチリ人医師を対象とした胃癌早期診断技術研修が行われました。その参加者の1人に、チリ人医師ペドロ・ヨレンス博士がいます。博士は、この研修を経て、胃癌のスクリーニングプロジェクトを提案・実行します。このプロジェクトは胃癌の診断・治療に対する技術を発展させることを目的として開始され、JICAや村上教授の支援を受けつつ進展し、1978年には、サンティアゴにあるサン・ボルハ病院内の胃癌診断センターの設立に至りました。これは、バルパライソのバン・ブレン病院、キジョタ病院に受け継がれ、1982年まで実施されました。ヨレンス博士は、後の講演で、「村上教授によって、私は胃癌を研究することに人生を捧げるようになりました」と、自身の人生を変えた村上教授との出会いについて語っています。

1981年からの15年間、JICAの後援により、毎年1回、サン・ボルハ病院・日智消化器病研究所（胃癌診断センターから発展）にて、国

際消化器病研修会が行われました。本学からは、中村恭一教授（第一病理学）らが講師として参加し、消化器癌早期診断の指導教育を行ってきました。この研修会には中南米諸国から多数の参加者があり、1996年3月までの総参加者数は約250名にも達しました。中村教授ら日本人医師4名は、これら功績により、チリ政府より「ベルナルド・オヒギンズ勲章」の叙勲を受けています。また本学では、同じくJICAの研修コースとして、1991年から15年間にわたり、毎年10名程度の中南米の医師を日本に招聘し、早期消化器癌の診断トレーニングを行いました。

当時のJICA研修コースで日本式の診断・治療技術に親しんだ中南米の医師たちは、今日の日智医学交流の原動力となっています。そして、かつての胃癌早期診断の舞台であったサン・ボルハ病院・日智消化器病研究所は、この度LACRCが参加する早期大腸癌検診プロジェクトにおいて、内視鏡センターとしての役割を担うこととなりました。

このように、LACRCの活動は、本学の長年にわたる南米における取り組みの延長線上にあります。そして今後も、LACRCを拠点として、本学は中南米諸国との交流を継続し、互いの学術・医療におけるさらなる発展を目指します。

活動報告

2012年1月8日から14日まで、本学人体病理学分野の江石義信教授と国際交流センターの吉田丘特任教授が、訪智しました。両教授は、CLC、チリ大学、JICAチリ支所、在チリ日本大使館等を訪問し、現在JICA・JSPSにおいて仮採択がなされている分子生物学分野の科学技術研究員派遣についての事前調査を実施しました。また、大腸癌集団検診プロジェクトの実施についてさらに強化・展開させるべく、ハイメ・マニャリッチ保健大臣を訪れ、具体的な協力体制や活動のあり方について協議したほか、同プロジェクトの内視鏡センターとなるサン・ボルハ病院やエドワルド・ペレイラ病院を視察。近年の本学からの派遣団としては初めてチリ外務省への表敬訪問も果たしました。また、滞在中に、現在プロジェクトセメスターの課程で研究実習を行っている本学医学部4年生の研究発表会も企画され、江石教授、各担当教官、学生たちの間で活発な討論が行われました。



CLC内での会議の様子



チリ大学訪問



江石教授とマニャリッチ保健大臣



日本大使館訪問



外務省訪問



学生研究発表会

Staff

昨年1月より、CLCや保健省直轄のサン・ボルハ病院で、内視鏡の臨床指導に取り組んでいた西蔭徹郎講師が、任期満了のため、2月に離任されることになりました。今回は、1年間にわたるチリでの活動を振り返っていただきました。

若手医師に日本の内視鏡技術を指導

西蔭徹郎講師 LACRC 食道・一般外科学分野

2011年1月にサンティアゴに赴任し、まさにあつという間の一年が経過しました。2月に帰国予定となっており、このニュースレターの発刊とともに帰国ということになりそうです。さて、この1年を振り返ってみたいと思います。

東京医科歯科大学(以下TMDU)とクリニカ・ラス・コンデス(以下CLC)が協定を結んだ「チリ大腸癌早期発見プロジェクト」の中で、私に与えられた任務は現地の若い医師に大腸内視鏡の技術、診断を指導するというものでした。私はTMDUから1年という単位で派遣される最初の内視鏡医師であったため、はたしてどのような業務内容になるのか期待と不安で一杯の状況でした。実際に当地に来てみると、協定先の病院はCLCでしたが、このプロジェクトの内視鏡センターがパブリックホスピタルであるサン・ボルハ病院(以下HSB)に設置されたため、私の主な活動拠点はHSBとなりました。CLCは最新の設備を備えたプライベート病院である一方で、HSBは非常に古く、設備の面でも乏しい対照的な病院です。しかしこの病院には以前JICAのプログラムで日本に来たことのある親日家が多く、また強い情熱をもった医師が多いため、私としては非常に仕事やりやすく、かつ楽しいチリ生活を送ることができました。

私にはこの1年で計9名の若い消化器内科医、外科医を生徒として割り当てられ、それぞれ期間の差はあるものの、大腸内視鏡の

みならず、上部消化管内視鏡も指導してきました。6月には食道表在癌が見つかり、日本の得意分野である内視鏡治療を披露しました。また私は本来外科医であるため、週1回は手術に参加し、私の専門である食道癌患者の際は、私自身が術者を務めることもありました。

私生活でも当地のチリ人、日本人たちと様々な交流を持つことができ、非常に充実した一年を過ごすことができたといえると思います。帰国が近づき後ろ髪をひかれる思いですが、現在は後任の田中浩司先生にこちらでの仕事を引継ぎ中です。今後もこのプロジェクトが進展し、日本とチリの絆がより強固になることを祈念して、サンティアゴからの活動報告とさせていただきます。



現地医師宅で開催されたパーティーにて



CLCでの内視鏡治療

学生チリ体験記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学部4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へと派遣しています。LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。本年度は、6名の学生が派遣され、3名がCLC、3名がチリ大学の研究室で研究活動に励んでいます。本号では、チリ大学で研究をしている3名の学生に、チリ留学の体験談を紹介していただきます。

初めての留学と 研究発表

伊原史崇 チリ大学医学部腫瘍免疫学研究室所属

免疫学的治療、海外留学に興味があったためチリ大学の免疫学研究室への派遣が決まり、2011年10月から2012年2月まで留学させていただきました。私の研究テーマは皮膚がんの免疫学的治療であり、本治療法は末期の患者さんに対し予後改善をもたらすものとして、現在注目を集めています。研究室にはアルゼンチン、ブラジル、イタリア出身の研究者も在籍しており、国際性豊かな環境で研究を行うことができました。

研究室での主なコミュニケーションと研究手法については英語で行い、あいさつやちょっとした相槌をスペイン語で行う生活でした。実際に研究を行う際は、チリ人の学生と2人1組でチームを組んで研究を行いました。

研究手法の改善や新たな手法を探すために論文を読み込み、ポスドクの研究者・教授と意見を交換しながら、比較的自由に考えて動くことができる研究室でした。細胞培養の実験にかかる日数を考え、自分たちで効率のよい計画を考え、設備の予約や試薬の発注も行うので、日本語ならば簡単にできることがこんなにも難しいのかと苦労しましたが、日本にいないとできない貴重な経験になりました。



学生研究発表会にて



サッカー場にて

研究室のメンバーはみな親切で、チリ大の学生が行く地元の定食屋や屋台に連れて行ってくれたり、一緒にテレビでサッカー観戦をしたり、実際にスタジアムにも行ったりして、交流を深めることができました。

チリはアボカドが特に美味しく安いです。私は、コンプレートというアボカド、トマトなどをのせたホットドックが好きで、大学周辺の決まった売店でマヨネーズ抜きをいつも注文していたのですが、1週間もするとオツケーサインを作るだけでおばちゃんがバッチリ準備してくれるようになりました。チリ大学に在籍したことで、チリの学生の生活や考え方に触れる機会が多かったです。地球の反対側でしたが、みんな明るく優しく、ジョークのポイントも共有でき、非常に楽しい生活を送ることができました。

またチリでの研究進捗の報告会として、プレゼンテーションをする機会が2度ありました。それぞれ10分という短いものでしたが、英語で行う必要があり、練習を繰り返し実際に多くの人の前で発表する機会を持てたことはとても大きな将来への経験となりました。医師となる前であり、学生として発表できたので失敗を恐れずに臨めたのがよかったです。

学生という立場で、海外で生活・研究をする上で得たものは、実際に留学する前に想像していたものとは違う部分も多く、また想像以上に多くのことを得られました。私は日本での研究とチリ留学についてかなり迷ったのですが、勢いで飛び込んでみてよかったと思います。

チリを訪れて

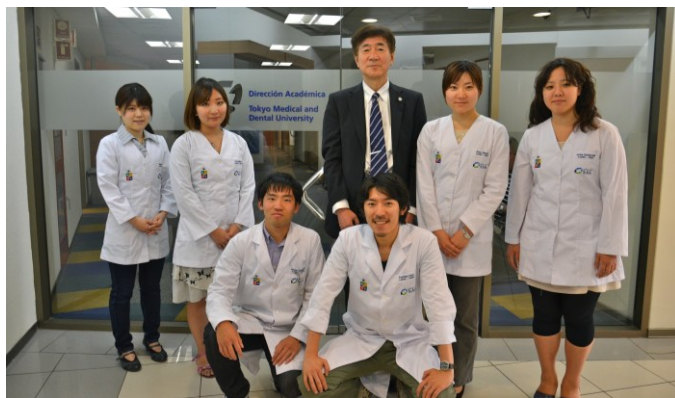
研究と食文化と

澤柳文菜 チリ大学医学部自然免疫学研究室所属

こんにちは。私は現在、プロジェクトセメスターの期間をチリで過ごしています。今回は私がチリで行っている研究についてと、チリでの食事について書いていきたいと思います。

まず研究についてですが、私は Universidad de Chile の Laboratorio de Inmunidad Innata (自然免疫学研究室) で、IBD (炎症性腸疾患) 患者における遺伝的ファクターについて調べています。具体的には、IBD 患者における症状の重軽には、ST2 遺伝子という遺伝子の遠位プロモーター領域における SNP が関わっているのではないかということに注目し、IBD 患者の血液サンプルから DNA を抽出して SNP の解析を行い、その結果を臨床的、内視鏡的な診断結果や IBD が原因となった手術歴の有無などと照らし合わせ、関係性を見出すという作業を行っています。研究室の研究レベルは非常に高く、研究員は Ph.D. の学生が多く、年齢も割と近いこともあり、とても刺激になります。ここに来るまでは免疫学については、漠然とした教科書的な知識しかなかったのですが、今回このプロジェクトに参加し、具体的に遺伝子における SNP などの遺伝的多型が、臨床的にどのように患者の症状に影響を及ぼすのかということについて以前より具体的にイメージを持つことができるようになりました。また、研究室の方々と一緒に、学会にも参加させていただき、様々な研究者の発表を聞くことができ、とても勉強になりました。

それでは、ここからはチリの美味しいものについて書いていきたいと思います。日本にはなかったチリの食事というと、ペブレ (Pebre)、エンパナーダ (Empanada)、コンプレート (Completo)、ウミータ (Humita)、パステル・デ・チョコロ (Pastel de Choclo)、カスエラ (Cazuela)、パン・デ・パスクア (Pan de Pascua)、コラ・デ・モノ (Cola de Mono)、ピスコ・サワー (Pisco Sour)、チリモヤ (Chirimoya)、ルクマ (Lucuma) など様々です。他にも、サーモン、ウニ、ワイン、野菜全般、果物全般が安い上に美味しいです。



チリ訪問中の江石教授と留学生メンバー



EmpanadaとPastel de choclo

まず、Pebreについてですが、トマト、コリアンダー、玉葱、唐辛子のみじん切りを、塩とオリーブオイルで和えたもので、レストランに行くと必ずと言っていいほどパンと一緒に出されます。Empanadaというのは、ミートパイのようなもので南米各国にあり、彼らにとっては日本人にとってのおにぎりのようなものだそうです。チリで最も一般的なのはエンパナーダ・デ・ピノ (Empanada de Pino) といい、中に玉葱、ひき肉、茹で卵、オリーブが入っています。Completoはホットドックのことですが、トマトとアボカドディップとマヨネーズがたっぷり乗っています。お察しの通り、カロリーは1個1000kcalにもなることがあるそうですが、とても美味しいです。次に Humita, Pastel de Choclo ですが、Humita はトウモロコシと玉ねぎのミンチをトウモロコシの葉に包んで茹でたものです。Pastel de Choclo は Humita と似ていますが、こちらはトウモロコシグラタンのようなもので、中に茹で卵、オリーブ、鶏肉が入っていて、表面はトウモロコシクリームで覆われています。Cazuela は、じゃがいも、人参、玉葱、鶏肉 (または牛肉)、トウモロコシをコンソメで味付けしたスープです。Pan de Pascua, Cola de mono は共にクリスマスの時期に登場するもので、Pan de Pascua はドライフルーツやナッツの入った円型のケーキ、Cola de Mono はコーヒークリームを使ったミルクコーヒーのようなカクテルです。Pisco Sour は、南米で有名な葡萄の蒸留酒である Pisco を使ったカクテルで、Pisco、卵白、砂糖、レモン、氷を入れてシェイクし、仕上げにシナモンを上に振りかけます。Chirimoya はペルーやエクアドル原産のフルーツで、甘く、クリーミーです。Lucuma もペルー原産のフルーツですが、こちらはカボチャや栗のような味です。チリ人は本当に Lucuma が好きなようで、アイスやケーキなどで頻繁に登場します。まだまだチリには私も食べたことのない料理がたくさんあると思いますし、なかなか文章では伝えきれないので、実際にチリを訪れて本場のチリ料理を食べるのが一番です！また、これらの料理はチリに特有というものは少なく、どちらかというと南米全体で一般的なものが多いようです。ですが、それぞれの国で少しずつ違って、各国の違いを楽しみながら食べ比べてみるのも楽しいかもしれませんね。

それでは残りわずかですが、研究を仕上げつつ、チリの食事を満喫したいと思います。!Adios!

豊かな交流に 支えられて

寺本有里 チリ大学医学部神経科学研究所所属

プロジェクトセメスターの5カ月間をチリで過ごさせていただきましたが、他では得難い貴重な留学経験になりました。

まずチリに来て戸惑ったことは、チリの公用語はスペイン語で、街中では英語がほとんど通じないということです。これには不便な思いもしましたが、語学の勉強をしたいというモチベーションにもなりました。教養の授業でドイツ語を1年間学んだとはいえ、ほとんど英語以外の外国語を知らなかった私にとっては、とても新鮮で興味深いものでした。また、日本語の勉強をしているチリの友人もたくさんできました。サンティアゴ大学の日本語学科の学生や、CEIJAという日本語学校の学生です。彼らとは日本語、スペイン語、英語を交えて会話をし、互いに様々なことを教え合って、楽しく有意義な時間を共に過ごせました。皆日本の文化にも非常に興味を持っていてくれていて、チリと日本の文化交流のイベントでは、CEIJAの友人たちがはっぴを着て、よさこいソーラン節を披露してくれました。はっぴも自分たちでデザインし作成したと嬉しそうに語ってくれました。



アンデス山脈をバックに



日本語学校の生徒たちと

また、その交流会ではチリ文化の紹介もあり、チリの伝統的なダンスであるクエカ(Cueca)を鑑賞することができました。女性は色鮮やかな服を纏い、男性は拍車のついたブーツを履いて踊る、3拍子のリズムが特徴的なダンスでした。Cuecaに限らず、チリの方々はダンスが大好きですとても上手です。音楽があればどこでも何時間でも楽しめるようなそんな陽気さが魅力的でした。

チリの魅力は他にも本当にたくさんありますが、そのうちの一つは、首都サンチアゴからでも車で1~2時間で山にも海にも行け、広大な大自然に出会えることです。アンデス山脈やcajon del maipoで目にした景色は圧巻でした。Valparaisoという港街の丘の斜面に立ち並ぶ、色とりどりのたくさんの家々は、世界遺産にも登録されています。「宝石の詰まった街」と形容される美しさです。非常に美味しい海産物も頂けます。

さて、肝心の研究室はというと、親切で陽気なたくさんの方々に恵まれて、毎日充実した研究生活を送ることができました。私の研究内容は、脳の神経細胞の発達(特に大脳皮質において)が、特定のタンパクの働きによってどのエリアで、どの段階で調節を受けているのかということです。具体的な作業としては、様々な発達段階のラットの脳を用い、二方向のスライスを得、免疫染色を行い、タンパクがどこで強く発現しているかを調べていくというものです。はじめに論文を読み、日本語が使えない中で研究内容をしっかり理解するのはなかなか大変でしたが、一度理解するとその後は比較的スムーズに進みました。他の方々の関連した研究について教えて頂くのも、興味深く楽しかったです。留学生活は2月末で終わってしまいましたが、またいつか必ず訪れたいと思える素敵な国でした。

編集後記

このNewsletterを通してLACRCやチリを知っていただき、皆様との距離が少しでも縮まればと思っております。今回第1号では、LACRC開所の経緯と現在の活動状況を中心にご紹介いたしました。皆様からのご意見・ご感想・ご質問等がございましたら、お気軽にご連絡くださいますようお願い申し上げます。今後も暖かいご支援をよろしくお願いいたします。(四宮)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 1, January 2012

[発行日] 2012年1月31日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontensilla 440, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 378 Fax: (56-2) 610 8610
Email: rshinomiya@clc.cl

Newsletter

No. 2 March 2012

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

晩夏のサンティアゴより

サンティアゴの夏も終わりに近づきつつありますが、まだまだ暑い日々が続いています。気候区分上、サンティアゴは典型的な地中海性気候に属しており、冬に雨が多い一方で、夏は非常に乾燥しています。大気中の水分が少ないためかサンティアゴの夏の日差しは強烈ですが、日陰に入るとずっと涼しくなり、じとじとした暑さを感じることはありません。また、日中の気温は30℃まで上がるものの、朝晩は15℃前後まで下がるので、寝苦しさを覚えることもほとんどありません。「サンティアゴの良いものは、Weather(気候)、Wine(ワイン)、Women(女性)の“3W”である」という言葉がありますが、サンティアゴ赴任中は東京では考えられないほど快適な夏を過ごしております。

さて、前回Newsletter第1号では、ラテンアメリカ共同研究拠点(Latin American Collaborative Research Center: LACRC)の位置づけや、本学のラテンアメリカ諸国での活動の歴史に焦点を当ててご紹介させていただきました。今回第2号では本学がチリにおける大腸癌早期診断プロジェクトへの協力を開始するに至った経緯を中心にご紹介いたします。

伊藤 崇 LACRC 人体病理学分野



夏のサンチアゴ市街(サンタ・ルシアの丘から)



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
大腸癌早期診断 プロジェクト参画へ	2
活動報告	4
Staff (田中浩司助教)	5
学生チリ体験記	6

大腸癌早期診断プロジェクト参画へ

LACRCのメインミッションとして、チリにおける大腸癌早期診断プロジェクトへの参加・協力が挙げられますが、本学がチリにおける大腸癌早期診断プロジェクトに参画するに至った経緯をご紹介します。

本学のラテンアメリカにおける過去の取り組みの1つに、JICAやウルグアイ保健省等の協力の下、1996年～2006年にウルグアイにて実施された「大腸癌の早期予防・発見と治療プロジェクト」があります。このプロジェクトでは無症状の参加者約12,000名を対象として免疫学的便潜血試験を用いた大腸癌の集団検診が行われました(Eur J Cancer Prev. 2006;15:384-90)。癌による死亡率の低下のためには「癌の早期発見」が必須となりますが、ラテンアメリカ諸国ではその重要性はまだ一般に認識されておらず、無症状での癌検診に対する市民の関心は低いのが実状です。そのような中で、このプロジェクトの結果は無症状者を対象とした癌検診の有用性を示唆するものであり、ラテンアメリカ医学界にて大きく注目されることとなりました。

【写真】2009年7月14日、チリ保健省、CLCとの3者間協定の締結時
(左より江石教授、マニヤリッチ現保健大臣(当時CLC病院長)、大山学長、エラソ前保健大臣、ロペス医師)



チリにおける大腸癌死亡率低下に向けて

一方、チリでは近年の大腸癌死亡率の急上昇が問題となっており、2007年、クリニカ・ラス・コンデス(CLC)は、チリ保健省の協力の下、チリにおける大腸癌の早期発見・治療に取り組むことになりました。このプロジェクトのリーダーであるCLC大腸肛門科責任者・フランシスコ・ロペス医師は、本学のウルグアイでの取り組みを知り、2008年10月に本学・大山喬史学長宛てに協力を要請しました。

CLCからの要請を受けた本学は、CLCとの取り組みが本学の技術を国際医療福祉に活用する大きなチャンスであると考え、大腸癌早期診断プロジェクト参画に向けた検討を開始しました。初期の議論では、毎年CLCが主催する「消化器癌の診断と治療に関する国際研修コース」へ教員を派遣することなどが決定し、また、2009年7月には、大山学長を団長とした訪問団が現地を訪問、本学・CLC・チリ保健省の3者間にて「大腸癌に関する臨床・科学・学術協定」が締結され、協力体制の枠組みが確認されました。

この大山学長のチリ訪問の際、CLCから日本人赴任者用のオフィスを用意することが提案され、本学からの内視鏡医・病理医・分子生物学者の長期派遣と、本学の南米における活動拠点(LACRC)の設置が検討されることとなりました。そして、2009年11月、LACRC開設の協議のためにCLCからロペス医師、アルフレッ

ド・シャンヘル前CEOらが本学を訪問、「中南米教育研究拠点開設に関する覚書」が締結され、LACRCの開設が決定しました。

さらに本学は、大野喜久郎企画・国際交流担当理事(当時医学部長)、森田育男研究担当理事、吉澤靖之医療担当理事らの現地派遣を重ね、2010年1月には、本学・CLC・チリ保健省の間にて、大腸癌早期診断プロジェクトの具体的な方針を盛り込んだ「大腸癌診断国家プログラム及びパイロット・ステージ・プロジェクトの実施に関する協定」が締結されるに至りました。

しかしながらプロジェクト開始間近となって、チリ大地震や新大統領の就任に伴う保健大臣の交代など、プロジェクトを取り巻く状況の変化が相次ぎ、これに伴ってプロジェクトも大幅な計画変更を余儀なくされました。以来、LACRCは、プロジェクトのための環境整備や、大腸癌診断・治療の標準化、そして大腸内視鏡医の育成に取り組んでいます。様々な紆余曲折を経て、チリにおける大腸癌早期診断プロジェクトは、サンティアゴ、バルパライソ、プンタ・アレナスの3都市を拠点として、間もなく開始される予定です。



LACRC開設に関する覚書調印式(於東京)



大野理事らCLC視察



LACRC開設式での大山学長



2010年度プロジェクトセメスター学生たち



2011年消化器国際研修コース講師陣

2009

- 7月 大山喬史学長他、現地視察
TMDU・CLC・チリ保健省間にて臨床・科学・学術協定締結
- 8月 消化器癌国際研修コース開催(本学より講師6名派遣)
- 11月 CLCからの訪問団、TMDU視察
TMDU・CLC間にてLACRC開設に関する覚書締結
- 12月 TMDU大野喜久郎理事・森田育男理事他、現地視察

2010

- 1月 TMDU吉澤靖之理事他、現地視察
TMDU・CLC・チリ保健省間で大腸プロジェクト実施に関する協定締結
- 2月 チリ地震
- 3月 ピニェラ新大統領就任に伴う保健大臣の交代
- 4月 LACRC開設
人体病理学分野 伊藤崇助教 LACRC着任
- 6月 TMDU・チリ大学医学部間にて一般協定締結
- 7月 応用腫瘍学分野 植竹宏之准教授 LACRC短期赴任
- 8月 LACRC開設式典開催
消化器癌国際研修コース開催(本学より講師6名派遣)
フェリックス・ブルネス病院小児病棟に看護・診察室を新設
(本学のチリ地震震災募金より)
- 10月 2010年度プロジェクト・セメスター学生6名チリ到着

2011

- 1月 食道・一般外科学分野 西蔭徹郎講師 LACRC着任
- 2月 2010年度プロジェクト・セメスター学生帰国
- 8月 消化器癌国際研修コース開催(本学より講師6名派遣)
- 10月 2011年度プロジェクト・セメスター学生6名チリ到着

2012

- 1月 食道・一般外科学分野 田中浩司助教 LACRC着任
江石教授他現地視察
- 2月 食道・一般外科学分野 西蔭徹郎講師 LACRC離任
2011年度プロジェクト・セメスター学生帰国
- 3月 人体病理学分野 河内洋講師 LACRC着任

活動報告

村上秀徳・駐チリ日本国特命全権大使が、LACRCおよび大腸癌早期診断プロジェクト関連施設の視察として、2月23日にCLCを、3月8日にサン・ボルハ病院を訪問されました。

CLC訪問の際には、レネ・テヒアス病院長、パトリシオ・ブルディレス学術担当責任者をはじめとした関係者との会合の後、チリ側のプロジェクト・リーダーであるフランシスコ・ロペス医師から、大腸癌早期診断プロジェクトの概要と今後のスケジュールについての説明を受けられました。また、ロペス医師、田中助教、伊藤助教らの案内にて、LACRCオフィス、内視鏡室、腫瘍学・分子遺伝学研究所など、プロジェクトに関連する院内施設を視察されました。サン・ボルハ病院では、クラウディオ・ロブレス病院長をはじめとした関係者の立会いの下、日智消化器病研究所を視察され、同研究所のリカルド・エステラ所長、ロベルト・セゴビア副所長からは、プロジェクトにおけるサン・ボルハ病院の位置づけや日智消化器病研究所と本学との交流の歴史についての説明が為されました。

駐チリ日本国大使、LACRC訪問



CLC応接室にてテヒアス病院長と会談する村上大使



CLC腫瘍学・分子遺伝学研究所の視察



CLCにて記念撮影(左より伊藤助教、ロペス医師、村上大使、田中助教)



サン・ボルハ病院でスピーチをされる村上大使

村上大使はLACRCの取り組みに大変関心を持たれ、日本大使館としてもプロジェクトをサポートしていきたいとの心強いお言葉をいただきました。大腸癌早期診断プロジェクトや共同研究を通じて、LACRCは、日本が誇る大腸癌早期診断技術や研究技術を生かした国際貢献ができるよう、今後も取り組みを続けます。



サン・ボルハ病院内の日智消化器病研究所視察



サン・ボルハ病院にて記念撮影(左よりピント内科部長、エステラ所長、田中助教、村上大使、ロブレス病院長、伊藤助教、セゴビア副所長)

Staff

CLCやサン・ボルハ病院で、内視鏡の臨床指導に取り組んでいた西蔭徹郎講師の後任として、2011年12月に、田中浩司助教がLACRCに着任されました。

着任挨拶

田中浩司助教 LACRC 食道・一般外科学分野

このたび、本学が支援をしているチリにおける大腸癌集団検診プロジェクトに、内視鏡医として参加するため2011年12月末にサンティアゴに赴任してまいりました。同プロジェクトは、本格稼働に向けて最終準備段階であり、まもなくサンティアゴ、バルパライソ、プンタ・アレナスの3都市で開始予定となっております。

現在のところ私は、当プロジェクトのサンティアゴでの内視鏡センターが設置される国立サンボルハ病院で、前任の西蔭医師に引き続き当地の医師とともに内視鏡検査・治療を行っております。

チリに来て約3カ月が経ちました。こちらの気候は過ごしやすく、野菜・果物もとてもおいしく快適ですが、スペイン語でのやり取りには悪戦苦闘しております。これをいかに克服していくかが、現在の一番の問題となっております。



CLC内視鏡室にて

今後プロジェクトの進捗状況とともに、こちらでの生活についても、適宜ご報告させていただきたいと思います。

学生チリ体験記

本学は、2010年より、プロジェクトセメスターの課程にある医学部4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へと派遣しています。本年度は6名の学生が派遣され、3名がCLC、3名がチリ大学の研究室にて、2011年10月～2012年2月まで研究活動に従事しました。前号に引き続き、本号ではCLCで研究活動に取り組んだ3名の学生に、チリ留学の体験談を紹介していただきます。

臨床研究に触れて

山内郁乃 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属(前立腺癌)

私は日本の裏側の国、チリで研修させていただきました。チリは日本に比べて緑が多く、人々もおおらかな人柄で、ゆったりとした国です。私が滞在したサンチアゴの夏は、雨がなく、毎日からっとした晴天の日が続き、とても気持ちよく過ごせました。日中は強烈な日光が照りつけますが、夜は気温が下がり、ほとんどの家庭にはエアコンがありません。

私が研修を受けたのは、癌の遺伝子学的研究を行なう研究室です。CLCに隣接しているため、医師や患者を日常的に目にします。そのため自然と臨床を意識した研究になるのだと思います。実際、私は患者さんの標本を使いましたし、直接臨床に適用できる内容を研究テーマとしていました。具体的には、前立腺癌の新しいマーカー候補のPAPというものの有用性についてです。現在用いられているPSAという前立腺癌マーカーに加えてPAPが認可されれば、より正確に癌患者をスクリーニングできるので不要な生検数を減らせます。



誕生日パーティーにて



指導教官と(ラモス医師、山内、サンチェス研究員)

研究室の先生の講演を聞きに行く機会もありました。本研究は2002年にCLCで設立されたプロジェクトの一環として行われており、講演では私の担当した内容も含まれており嬉しかったです。また講演発表の仕方から学ぶことも多かったですし、研究の全体像を確認することもできました。本プロジェクトは、今後も標本数を増やしてさらに巨大化されるようです。

5カ月の海外研修中の経験は、研究に関することに留まりません。私はチリで誕生日を迎えたのですが、たくさんの方々に盛大に祝っていただきました。

日本では、職場で誕生日祝いをすることはあまりありませんが、チリでは職場でもケーキを用意するのが恒例です。誕生日は、独立記念日、クリスマス、お正月と並んでチリ人が特に重んじる日だからです。私の誕生日は日曜日でしたが、翌月曜日に秘書さんがサプライズでケーキを用意してくださいました。秘書さんは、事前に学生全員の誕生日をチェックしていたそうです。

誕生日当日には医科歯科の友人が、先生方を交えたパーティーを取り仕切ってくれて、各自の手料理を振舞っていただきました。前々からこっそりと準備を進めていたようです。素晴らしい友人と先生方に囲まれて幸せな誕生日になりました。

ありがとうございました。

5カ月間の経験を経て

山下将平 CLC病理学研究室所属

チリでの生活について簡単に述べていきたいと思います。まずは研究について。CLCの病理の研究室で研究を行っていました。テーマは子宮頸癌です。皆さんもご存じの通り、HPV感染によって発がんするという、女性にとってもメジャーな癌として知られています。

僕は細胞周期とそれに関わるタンパクの観点から子宮頸癌の研究をしており、毎日子宮頸部の上皮内腫瘍の標本の免疫染色という実験を行っていました。実験をする際は、技師さんに丁寧にやり方を教えてもらいました(大半がスペイン語です)。技師さんはとても良い人たちで、手厚く指導くださったので本当にありがたかったです。

プライベートに関しては、旅行について書きたいと思います。僕は2泊3日でアルゼンチン、その中でもブエノス・アイレスとイグアスに行ってきました。イグアスは言わずと知れた世界遺産の滝があります。とても雄大で感動しました。イグアスの滝はアルゼンチン、ブラジル、パラグアイの3つの国境に位置するのですが、壮大で美しい景色が日本にはないスケールを持っていてとても心が癒されました。

アルゼンチンでは牛肉が多く食べられており、なかでも分厚いステーキが有名です。肉の味付けは非常にシンプルで「チミチュリ」というサルサソースなどと一緒に食べるのが一般的だそうです。1日目の夜はブエノス・アイレスのオススメと言われた店で、2日目の夜はイグアスのレストランでビュッフェを食べたのですが、どちらもとても美味しかったです。特に1日目の店は肉が分厚いのはさながら、パスタの麺がうどんみたいに太かったのが印象的でした。



所属研究室にて



イグアスの滝をバックに

ブエノス・アイレスでパスタやピザのレストランを多く見かけたのは、イタリア移民が多いからということです。また、隣の国とはいえ、チリとアルゼンチンでは牛肉の味がまったく異なり、それは飼料の違いから来るそうです。

また、2月中旬、日本に帰る直前には、世界的に有名なアタカマ砂漠を旅行しました。アタカマ砂漠の中継地となるサン・ペドロ・デ・アタカマの町は、チリの北部に位置しており、標高は2500mほどです。アタカマ砂漠は「世界一降水量の少ない砂漠」といわれているそうですが、ちょうど自分の旅行期間中に夕立が激しく降ってしまったので、あまり観光ができませんでした。残念でしたが、非常に珍しい事態にめぐり合うことができたので、これもなかなか良い経験になりました。

約5カ月の滞在の間、大変なことも多々ありましたが、どれも日本に留まっていたではできなかったであろう、貴重な経験をたくさんさせていただきました。こちらで得た経験をぜひ将来に生かしていきたいです。



アルゼンチンの肉料理とパスタ

チリでの思い出

重政由希子 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属(大腸癌)

まず、私の研究についてです。私はCLC内の、腫瘍学・分子遺伝学研究室に所属していました。もう1人の日本人メンバーも、同じ研究室内で勉強していました。ここには約10人の研究者がおり、この内2名の女性研究員の方に面倒を見ていただきました。

研究内容は「チリにおける家族性大腸癌の遺伝子解析」です。ポリポーシスとは、消化管の粘膜に多数のポリープが発生する疾患の総称で、治療をしないと高確率で大腸癌を引き起こします。そのポリポーシスの原因遺伝子として、今回私の実験ではSMAD4遺伝子を取り上げました。具体的には、ポリポーシスの患者さんのSMAD4遺伝子の各エクソンにSSCP試験(一本鎖 DNA の高次構造変異のゲル易動度の差を検出する試験です)を行い、その遺伝子の変異の有無を調べるというものでした。

次に、チリでのクリスマスの様子を紹介します。この国では、12月は初夏にあたりますが、やはりクリスマスは一大イベントです。



真夏のクリスマスツリー



所属研究室のメンバーと

11月中頃からスーパーやショッピングモールでクリスマスの装飾がちらほらと目につくようになり、12月に入るともう町中がクリスマスムード一色です。例の赤い服を着込んだサンタクロースが炎天下にたたずむ様子は、やや滑稽に見えます。

チリは日本と違い、クリスマスは家族で祝われるのが普通です。クリスマスイブの夜には、各家庭で盛大なホームパーティーが行われます。私も12月24日の夜は、他の日本人のメンバー数人と一緒に、チリ人の友人のお宅にお邪魔しました。チリでは食事の時間が日本より大分遅いこともあり、パーティーは夜の9時頃始まりました。おつまみとビールをいただき、まずはプレゼント交換です。部屋に飾られた大きなクリスマスツリーの下に、あらかじめ両親から子供たちへのプレゼントや、親戚から届けられたいくつものプレゼントが置いてあります。そしてそれらに書いてある宛名を読んで配り、1人ずつ皆の前で開けていくのです。私たちも贈り物を持参し、プレゼント交換に参加することができました。

そしていよいよ食事の時間です。クリスマスの定番の七面鳥、そしてチリ風に炊かれたお米やポテトを堪能しました。そしてチリ特有のクリスマスフードである、Cola de MonoとPan de Pascuaもいただきました。Cola de Monoは牛乳・蒸留酒・コーヒーなどを混ぜたカルーアミルクのような飲み物で、Pan de Pascuaはナッツやレーズン等が入った甘いパンのようなケーキです。食事のあとは、親戚の方や近所の友人達の訪問があり、また、私たち自身もさらに違うお宅に出張するなど、朝の5時まで盛り上がりました。真夏の、そしてあたたかいチリの人々に囲まれたクリスマスを過ごすことができ、忘れられない思い出になりました。

編集後記

本号ではLACRC設立の経緯を特集いたしました。いかがでしたでしょうか？ 私自身は昨年よりLACRCオフィスに勤めておりますが、今回の特集でLACRC設立に尽力された関係者の皆様の熱意と努力を改めて知ることになりました。今後もより良い誌面を作成するため、皆様からのご意見・ご要望をお待ちしております。(四宮)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 2, March 2012

[発行日] 2012年3月30日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: rshinomiya@clc.cl

Newsletter

No. 3 May 2012

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

冬支度

南半球に位置するサンティアゴでは、短い秋を経て、ほどなく冬を迎えます。4月28日にはサマータイムが終了し、私の家では5月7日から暖房（セントラルヒーティングなのです）が入りました。街中からみえるアンデスの山々にも雪がちらほら見え始めました。朝夕はかなり冷え込むようになりましたが、日中の陽射しはまだまだ強く、日本との違いをまさに肌で感じております。

我が家のチリでの生活も2ヶ月余りが過ぎたところです。当初、小さな子供をつれての異国での生活には大きな不安を抱いておりましたが、過ごしやすい気候、気さくで親切的な人々、美味しい食事（お酒？）、などに癒され、少しずつ楽しめるようになってきました。スペイン語でのコミュニケーションには悪戦苦闘しておりますが、そんな苦労もまた、チリ生活ならではの楽しみとなりつつあります。

さて、チリからのニュースレターも第3号となりました。LACRC設立以来、進めて参りました大腸癌早期診断プロジェクトもいよいよ準備段階から実施段階へと進展することとなり、また共同研究、ラテンアメリカ諸国とのさらなる連携など、LACRCの活動も新たな局面を迎えております。スタッフは交代しましたが、今後もLACRCの活動やチリの文化・風土など、従来どおり「気軽に楽しく読んでいただけるよう」、皆様にお届けできればと考えております。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野

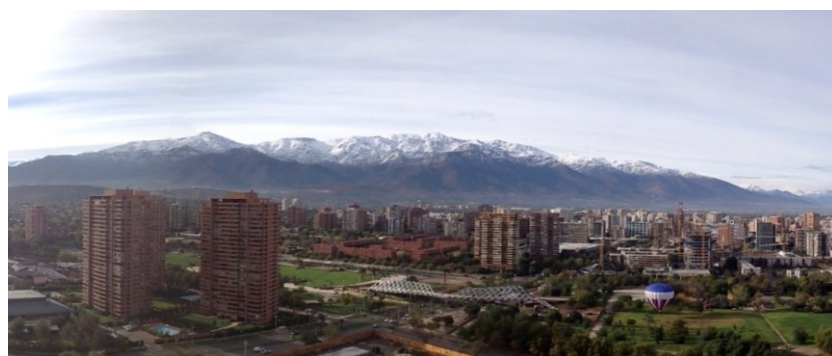


LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
大腸癌早期診断プロジェクト	2
活動報告	4
Staff	
（河内講師、伊藤助教）	5
CLC News	7



うっすらと雪化粧をしたアンデス山脈

大腸癌早期診断プロジェクト

本号では、ラテンアメリカ共同研究拠点 (Latin American Collaborative Research Center: LACRC) のメインミッションである大腸癌早期診断プロジェクトについて紹介いたします。

2010年1月に、本学はクリニカ・ラス・コンデス (以下、CLC)、チリ保健省 (以下、保健省) との間に「大腸癌診断国家プログラム及びパイロット・ステージ・プロジェクトの実施に関する協定」を締結し、チリにおける大腸癌の早期発見と治療に向けての取り組みを開始いたしました。しかしながら、協定締結後、チリ地震・地盤崩落があったことやチリ保健大臣がCLC出身者になったことなど、状況の変化に伴い計画変更が強いられたため、パイロットスタディの開始時期の変更を余儀なくされました。

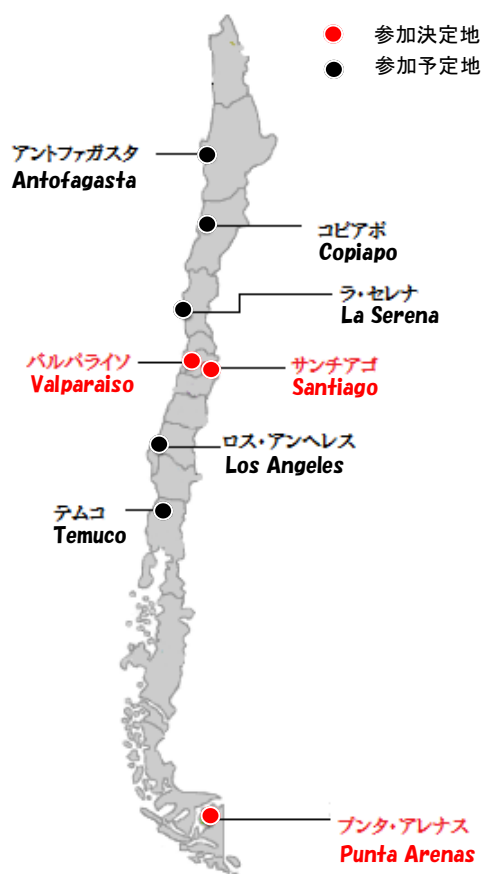
そこで、プロジェクトリーダーであるCLCのロペス医師は、第5州のバルパライソにあるエドアルド・ペレイラ病院や、第12州プンタ・アレナスのクリニカ・マガジャネス病院 (以下、マガジャネス病院) の協力を得て、各地方の資金を使ったサテライトプロジェクトを計画しました。また、首都サンティアゴにおいては、サン・ボルハ病院にある日智消化器病研究所 (以下、サン・ボルハ病院) に内視鏡医の育成を目的とした内視鏡センターを設置することができるよう関係各所へ働きかけました。

翌年の2011年には、バルパライソ、プンタ・アレナスにおいてサテライトプロジェクト実施の資金獲得に成功するとともに、サンティアゴにおけるパイロットスタディやサン・ボルハ病院の内視鏡センター設置の費用を保健省が負担することになりました。

これに伴い、チリ保健省と15の地方自治体、CLCをはじめとする4つの病院、また本学やチリ大学などの4大学が参加するCOLORED (大腸ネットワーク) が形成され、バルパライソ、プンタ・アレナス、サンティアゴで1万6000人を対象とした大腸癌早期診断プロジェクト PROYECTO DE PREVENCIÓN DE NEOPLASIA COLORRECTAL (以下、PRENEC) を実施することになりました。

そして2012年3月19日、PRENECを開始するための調印式および講習会が行われました。この調印式では、バルパライソ、プンタ・アレナス、サンティアゴの各拠点の代表が、PRENECの参加表明書に調印し、各拠点間での協力体制の確認を行いました。同日には、3拠点の秘書や技師、看護師、内視鏡医など約40名が、CLCのロペス医師、クロンバーク医師の指導する各分野ごとの講習会を受講しました。また同時に、CLCのボンセ看護師により、各拠点に設置されるPRENEC共通データベースの運用手順についての講習会も開催されました。なお、PRENECに関心を持つ第2州のアントファガスタ、第3州のコピアポ、第4州のラ・セレナ、第8州のロス・アンヘレス及び第9州のテムコの地方病院からも出席者があり、将来のPRENECへの加入を目的に今回の講習会に参加しました。

その後、まずはプンタ・アレナスとバルパライソでPRENECのメディアプロモーションが開始され、データベースの試験運用やマニュアル本の配布、CLC代表团による拠点訪問を経て、4月30日にPRENECがスタートいたしました。サンティアゴでは、8月に運用がスタートする予定です。



PRENEC対象者 16,000人

- ・50～75歳の者
- ・公的保険または民間保険加入者
- ・自覚症状がない者
- ・本PJIに同意する者

バルパライソ
エドアルド・ペレイラ病院
年間3,000人を対象

プンタ・アレナス
マガジャネス病院
年間3,000人を対象

サンティアゴ
サン・ボルハ病院
年間10,000人を対象



調印式にて参加表明書にサインをする各拠点の代表



講習会参加者の記念撮影

マガジャネス病院を訪問して

田中浩司 LACRC 食道・一般外科学分野

4月26日より泊2日で、現地視察のため、チリ最南端の都市プンタ・アレーナスにあるマガジャネス病院を訪問しました。南緯53度10分 西経70度56分に位置する同市は、サンチアゴから飛行機で南へ3時間半、マゼラン海峡に面し、パナマ運河が開通するまでは重要な航路として繁栄しました。現在は、人口約12万の静かな港町です。木が斜めに立つ強風で有名な都市ですが、訪問したときは天候に恵まれ、穏やかな天候でした。

同病院は公立病院ですが、新病院になって1年ということで、大変きれいで設備も最新のものが設置されていました。しかし、日本同様地方の医師不足のため、十分にそれを活用できていないようでした。同市の大腸がん罹患率はチリの罹患率の約2倍ということもあり、今回のプロジェクトは同市にとってかなり有益なものになると考えられます。当地での大腸癌検診プロジェクトの開始に伴い、今後、大腸内視鏡検査のため、定期的に同地を訪れる予定です。



CLC訪問団とビスポビッチ看護師(左から2番目)



カレロビッチ医師の案内により内視鏡室を見学

活動報告

JETROによるLACRC視察

2012年5月7日、独立行政法人日本貿易振興機構(以下、JETRO)サンティアゴ事務所の竹下幸治郎所長と延田幹夫氏がCLCを訪問され、LACRCの河内講師、田中助教と大腸癌早期診断プロジェクトやCLCとの共同研究について意見交換されました。

また、サンティアゴ事務所では、チリの医療機器市場への日本企業参入の可能性を調査しており、CLC大腸肛門科責任者のロペス医師にチリの医療機器会社と医師の関係性についてヒアリングされました。



LACRCオフィス入口にて(田中助教、竹下所長、延田氏、河内講師)

メディア掲載

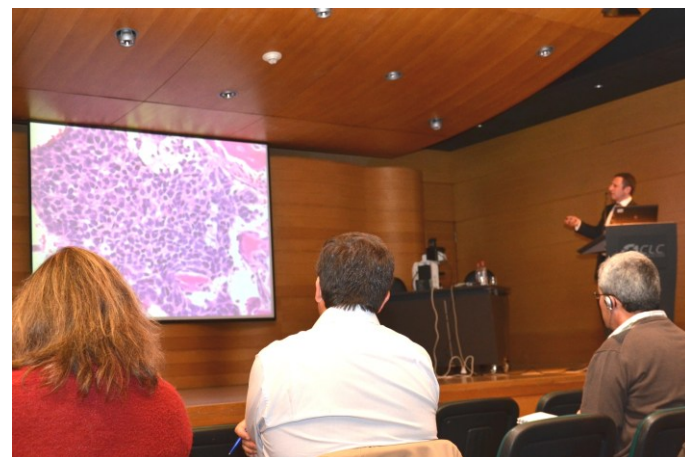
2012年2月に田中助教、伊藤助教が、「REVISTA FACULTAD DE MEDICINA」より、取材を受けました。「REVISTA FACULTAD DE MEDICINA」は、チリ大学医学部が年に数回発行している医学生や医療関係者を対象とした雑誌です。2012年6月発行の雑誌に掲載されており、本学のLACRCにおいての取り組みが紹介される予定です。



インタビュー時の記念撮影にて

THIRD CONJOINT COURSE IN SURGICAL PATHOLOGY

大腸癌早期診断プロジェクトの病理部門のリーダーであるクリニカ・ラス・コンデスのコントレラス病理部長が主催を務めるTHIRD CONJOINT COURSE IN SURGICAL PATHOLOGYが2012年4月16日から18日の間に開催され、LACRCオフィスより河内講師と伊藤助教が出席しました。本コースには、アメリカのMassachusetts General Hospital (Harvard Medical School)より講師陣が来智し、チリ国内やチリ近隣諸国より集まった病理医が3日間に渡り、講習を受けました。



Massachusetts General Hospitalのピーター・サドウ博士による講演

Staff

LACRC開所当時よりチリに赴任し、2年間にわたり、大腸癌早期発見プロジェクトに取り組んできた伊藤崇助教が、任期満了のため、2012年4月に離任いたしました。それに伴い本年3月に、河内洋講師が後任として、LACRCオフィスに着任いたしました。

初のLACRC赴任者として

伊藤崇 LACRC 人体病理学分野

私がチリに派遣されることが決まり、LACRCに赴任したのは2010年4月末のことです。チリでは2010年2月末に巨大地震があり、サンチアゴには建物倒壊などの大きな被害が無かったとはいえども、まだ十分に大災害の爪痕が残っていました。

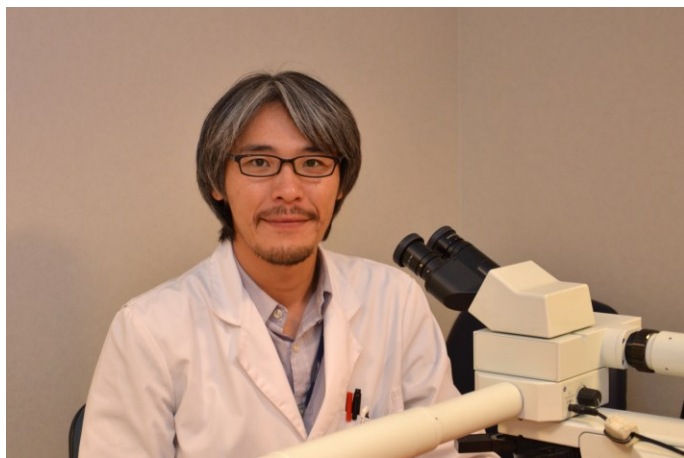
以来2年間にわたり、LACRCの病理スタッフとして、CLCでの病理診断業務や大腸癌の病理学的・分子生物学的研究に参加してきました。CLCと本学が主導する一大計画である大腸癌早期診断プロジェクトにおいては、病理診断標準化のためのプロトコルの作成に携りました。プロジェクトは間もなく実施に移される予定ですが、開始を見ぬまま河内講師に任務を引き継ぎ、帰国の段となりました。このスタートの現場に居合わせないことは心残りですが、日本からエールを送り、見守りたいと思います。

赴任以前の私は海外経験に乏しく、海外での勤務に大きな不安を感じていましたが、初めての経験に戸惑いながら任務に臨む私を、チリ人スタッフの方々はとても温かく迎えてくれたため、打ち解

けた雰囲気の中で共に仕事をすることができました。国が異なっても現代医学の基礎知識が変わらないのは当然なのですが、日本から見れば地球の裏側にあるチリで医学を学んだ医師・研究者らと学術的な議論を共有できたことは、私にとって新鮮でかけがえのない機会でした。このような経験を通じて、今では以前より地球が一回り小さく感じられるようになりました。

また私は本学からLACRCに派遣された初の職員であったため、始動したばかりのLACRCのオフィスが赴任者にとって活動しやすい環境整備することに始まり、研究・活動費の取扱いの検討、プロジェクト・セメスターでチリに来た学生生活・研究の補佐などにも多くの時間を費やす必要がありました。当初は慣れない環境の中で、学内勤務では携わったことのない業務を行うことに戸惑うこともありましたが、LACRCの秘書をはじめとしたCLCのスタッフと共に、自分にできるかぎりLACRCの基盤作りに精を出しました。

生活面でも、各種手続き、移動、買い物など、初めは何をするにも



伊藤助教(病理研究室にて)



病理の仲間と

悪戦苦闘する毎日でした。孤軍奮闘するうちに、徐々に増えていったチリ人や在チリ邦人の知人・友人の助けを借りながら、次第に快適な生活を営めるようになったことを思い返すと、とても感慨深いものです。チリ人・邦人を問わず、共に食事にでかけたりアクティビティをしたりする機会も多く、例えばCLC病理の同僚と何度もボーリング場へ出かけたこと、邦人の方々と海釣りに出かけたことなど、楽しかった思い出は数えきれません。



CLCの同僚とボーリング場にて

この2年間、素晴らしい人間関係にも恵まれ、充実した得難い経験を積ませていただきました。LACRCを通じた本学の南米における取り組みはまだ緒に就いたばかりですが、今後LACRCに関係する全てのメンバーが充足感と誇りを得られるようなプロジェクトへと発展すること、そしてこれが日智交流の架け橋の一つとなることを心より祈念し、離任の言葉とさせていただきます。



ロベス医師等とのバーベキューにて

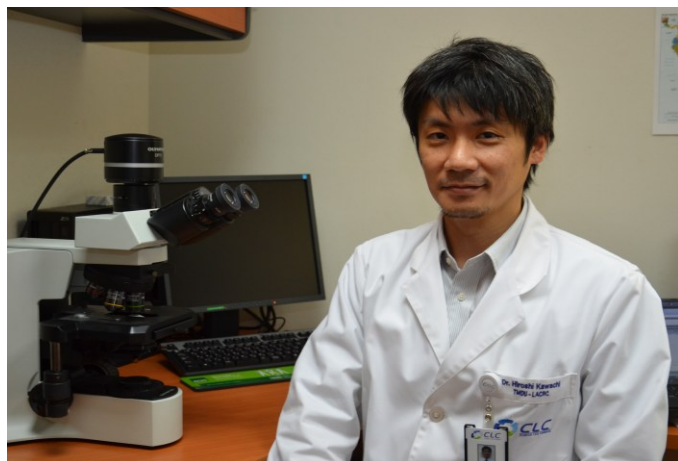
着任挨拶

河内洋 LACRC 人体病理学分野

本年3月17日より、伊藤崇助教の後任として、東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点(LACRC)に赴任いたしました。伊藤助教と同じく人体病理学分野からの派遣となります。日本では病理医として、主に臨床分野での仕事に携わって参りましたが、この度、LACRCに赴任し、大腸癌早期診断プロジェクトの推進のみならず、日本・チリ共同研究への取り組み、プロジェクトセメスター、ラテンアメリカ諸国との連携など多岐に亘るミッションを眼前にして、果たして自分の才覚で対処できるのかと不安を感じております。幸い、前任者の尽力により良好な職場環境、関係各所との協力体制、人間関係を引き継ぐことができたことは救いとなっております。

LACRCは今後スタッフの増員が見込まれており、成果が求められる段階に入りつつあります。重圧のなかではありますが、何事も「楽しく、激しく、自分らしく」取り組んで参りたいと考えております。

LACRCスタッフ、ニュースレターともども、皆様の暖かいご支援、何卒よろしくお願い申し上げます。



河内講師(LACRCオフィスにて)

CLC News!

LACRCは、CLCとの間で締結した「ラテンアメリカ教育研究拠点(LACRC)開設に関する覚書(2009年)」に基づき、2010年4月よりCLC内にオフィスを構えています。CLCは、チリ共和国内では、1、2位を争う医療設備を備えた私立病院であり、最高レベルかつ安全な医療を提供することを理念とし、最新の医療環境の構築を追求し続けています。本号より、LACRCスタッフが駐在するCLCの最新情報をご紹介します。

PREVICOLON(大腸癌検診フェア)

2007年よりCLCにて毎年開催されているPREVICOLON(大腸癌検診キャンペーン)が、今年度も4月9日～20日の間に開催されました。PREVICOLONは、PRENECのリーダーでもあるCLC大腸肛門科責任者のロペス医師や、消化器科責任者のフルクサ医師を中心に年に1回実施されています。このキャンペーン中には、通常の半額で免疫学的便潜血検査を実施しており、陽性と出た患者には、通常の3割引の価格で内視鏡検査を提供しています。毎年このキャンペーン中に400人～600人ほどの患者が、免疫学的便潜血検査(iFOBT)を行っており、来年も大腸癌の早期発見を目的に本キャンペーンが実施される予定です。なお、期間中には、大きな大腸模型の設置や大腸癌に関するビデオの上映が行われ、来院者に向けて大腸癌の早期発見・予防の必要性を訴えました。この大腸の模型は、チリ国内各地に貸し出されており、チリ国民に対する大腸癌検診への啓発活動に活躍しています。



PREVICOLONの説明パンフレットとiFOBTキット



大腸模型の内部(中央奥:ポリープ、右側手前:進行癌)

編集後記

田中助教、河内講師の着任に伴い、LACRCオフィスのスタッフが新しくなりました。また今年度中に、助教1名、大学院生1名が着任予定ですので、更にオフィスが賑やかになりそうです。今後ともNewsletterを通じて、近況をご報告してまいりますので、今後の誌面にあたり、皆様からご意見・ご要望等がございましたら、お気軽にご連絡くださいませ。(四宮里枝子)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 3, May 2012

[発行日] 2012年5月31日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: rshinomiya@clc.cl

Newsletter

No. 4 July 2012

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

冬のスモッグ

サンティアゴは周囲を山脈に囲まれ盆地状の地勢であることから、毎年冬になると光化学スモッグがしばしば発生し、深刻な問題となっております。サンティアゴでは、冬季は排ガス対策として自動車のナンバー別走行規制が布かれ、違反すると罰金が科されます。毎朝、大気汚染の程度と規制情報をチェックするのが日課となっております。

光化学スモッグの症状としては、目がちかちかする、異物感、流涙、眼・喉の痛み、咳、皮膚の発赤など。重症例では呼吸苦、手足のしびれなどもみられるそうです。チリに赴任し、健康的な生活を謳歌しているはずの私ですが、このところやけに目がしょぼしょぼとし気になっておりました。日本でよく味わった徹夜明けの状態に似ており、睡眠時間が充分であるにもかかわらずいったいどうしたのだろうと思っておりましたが、これはスモッグのせいかもしれません。日本でも夏に光化学スモッグ注意報が出されることはありますが、サンティアゴのそれはより深刻で、スモッグに包まれ不気味な色彩を帯びた空を見上げていると不安を覚えることがあります。陽気な人々で知られるラテンアメリカですが、大都市としての問題点を種々抱えているという点も無視することのできない側面であります。

チリ・ニュースレター第4号では、進行中の大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の報告、同プロジェクトの中核であるCLC・ロペス医師研究室における遺伝性大腸癌研究のご紹介とともに、LACRCの活動をお伝えしてまいります。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



サンチアゴのスモッグの様子(通常時は山の向こうに都市部のビルが見える)



LACRC TMDU
IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
チリにおける遺伝性大腸癌	2
PRENECの進捗報告	3
活動報告	5
CLC News	6

チリにおける遺伝性大腸癌

近年、チリでは大腸癌死亡率の急上昇が問題となっています。大腸癌の一部には、遺伝的要因があることが既に解明されており、先天的に遺伝子の変異が見られる場合、癌発症の生涯リスクが高いことが判明しています。クリニカ・ラス・コンデス（以下、CLC）の分子遺伝学・腫瘍学研究室は、遺伝子の変異の有無を突き止める遺伝学的研究を実現できる設備と技術を備えるチリで唯一の研究室であり、研究成果は、チリ国内及び海外の様々な出版物にて発表されています。本号では、その研究の一部をご紹介します。

癌全症例の約5%を占めているLynch症候群（HNPCC）は、癌を抑制する遺伝子であるMLH1やMSH2などの変異によって引き起こされ、遺伝性の要因が発症に深く関与していると考えられています。MLH1とMSH2遺伝子に変異した患者の大腸癌発症率は約80%であり、大腸だけではなく、子宮等、他臓器の癌を新たに発症するリスクも高くなります。

また、大腸にできるポリープが特徴的な家族性腺腫性ポリポシス（FAP）は、遺伝性大腸癌として次に良く見られるタイプであり、大腸癌全症例の1%を占めています。FAPは、APC遺伝子の変異が要因で、変異があると診断された患者は、50歳を迎える前に大腸癌を発症するため、予防的大腸切除が勧められています。

そのほかにも、大腸癌の全症例の0.1%を占める若年性ポリポシスや、Peutz-Jeghers 症候群、Cowden症候群などが遺伝性大腸癌として挙げられます。

これらの疾患は、癌と診断されるまで、患者のほとんどが無症状であるため、罹患している家族の遺伝子解析をすることが、癌発症のリスクを軽減する予防的医療に繋がります。これらの症候群に関与する遺伝子の変異を見つけることを目的とし、CLCの分子遺伝学・腫瘍学研究室では、遺伝子解析を通じて、罹患している家族の遺伝子研究を行っています。

CLCの研究チームは、遺伝性癌が疑われる患者を抽出し、家族の癌の既往歴のヒアリング、APC遺伝子やMLH1・MSH2遺伝子の変異、マイクロサテライト不安定性検査、免疫学的便潜血試験（iFOBT）を実施します。これらの検査により、遺伝性大腸癌の原因遺伝子の変異が疾患の原因であるという結果を得た時点で、無症状の患者家族に対して、リスク低減のための予防的措置のカウンセリングを行っています。

また、CLCでは、パンフレット等を通じ、遺伝性大腸癌についての積極的な情報発信を行っており、希望者には遺伝性癌のリスクの有無を判定する遺伝子検査を有料で提供しています。

これまでに研究チームは、遺伝性大腸癌の家系を約150家系をフォローしており、そのうち115家系が遺伝子解析を実施済みです。その中で、変異が見られる家系については、定期的な大腸内視鏡の実施など、フォローアップを行っています。また、これらのデータはチリにおける大腸癌の環境的および遺伝的危険因子を明らかにするために使用されています。

研究チームは、米国のクリーブランドクリニックの支援を受けており、今後は、本学もLACRCを通じ、大腸癌の早期診断治療に役立つ分子生物学的や臨床病理学的研究の支援を行う予定です。



研究チームのピント看護師、カリン研究員、ロベス医師

現時点の患者統計数

症候群	家系数	検査済	変異あり
FAP	39	36	34
AFAP(※)	30	18	0
Peutz-Jeghers 症候群	12	8	7
Cowden症候群	1	1	1
若年性ポリポシス	1	1	0
過形成ポリポシス	1	1	0
TOTAL	84	65	42

(※)AFAP=Attenuated FAP

Lynch症候群	家系数	検査済	変異あり
アムステルダム基準	23	21	19
ベセスダ基準	42	29	3
TOTAL	65	50	22

PRENEC最新情報

本年5月より、大腸癌検診プロジェクトPROYECTO DE PREVENCIÓN DE NEOPLASIA COLORRECTAL (以下、PRENEC)が第5州バルパライソのエドアルド・ペレイラ病院と第12州プンタ・アレナスのクリニカ・マガジャネス病院(以下、マガジャネス病院)で開始され、CLCに続々と採取済みのiFOBTが到着しています。CLCの腫瘍学・分子遺伝学研究室では、ビラン研究員が連日解析作業を行っており、これまでに約650名分の結果解析が終了しました。

順調な滑り出しをみせるマガジャネス病院

第一陣としてスタートしたマガジャネス病院では、4月中旬より、看護師が地域の保健所にてプロモーション活動を実施しました。その活動は、現地マスメディアに大々的に取り上げられ、現時点で580名がPRENECに登録しています。登録者は、iFOBTキットの使用方法のレクチャーを受講後、便潜血反応検査を行っており、陽性者は7月11日より大腸内視鏡検査を開始しております。

内視鏡検査開始にあたっては、LACRCスタッフの田中助教とCLCのクロンバーク医師が3日間現地に赴き、20件の内視鏡検査を実施したところ、60%にポリープが見つかる結果となりました。マガジャネス病院には、内視鏡医が少なく、今後、田中助教は月1回のペースでサポートに赴く予定となっています。

今回は、河内講師もマガジャネス病院を訪れ、日本における大腸腫瘍の病理診断基準や検体の取扱い方についてレクチャーするとともに、同病院病理診断部の設備や業務状況の視察を行いました。同病院病理診断部は、パステルナク病理部長のほか若手病理医1名の、病理医2名態勢で診断業務にあたっています。日本と同様、チリでも地方の病理医不足は深刻で、十分とは言えない人員での業務を余儀なくされています。PRENECプロジェクト開始に伴う業務負担の増加に関しては、今後河内講師も協力して対応する方針となりました。またプンタ・アレナスはチリ国内で大腸癌の死亡率が最も高い地域として知られています。原因は種々指摘されていますが、パステルナク医師は、この地域に特にユーゴスラビアからの移民が多いことが一因と推測しており、同地域住民を対象とした疫学的・遺伝子学的調査プロジェクトの立ち上げを提案され、今後、調査・研究環境の整備を行っていくことで同意しました。

なお、今年度末までに約3000名を対象とする計画になっていますが、現在までの対応者数は当初の想定以上となっています。本プロジェクトの評判が市民に広まったことで、さらに来院者数が増え、担当スタッフがフル稼働で対応しています。

またLACRCスタッフ訪問時には現地メディアによる取材が行われ、田中助教が大腸内視鏡を実施する様子が掲載されました(参照：http://www.radiopolar.com/noticia_61429.html)。記事には、「PRENECは今後も継続すべきプロジェクトである(プンタ・アレナスの保健省高官のコメント)」とあり、プンタ・アレナスでのPRENECは、市民及び政府機関からも高く評価されています。



田中助教による内視鏡検査の様子



パステルナク病理部長と河内講師

エドアルド・ペレイラ病院

サン・ボルハ病院

第5州バルパライソのエドアルド・ペレイラ病院でのPRENEC開始から、約2か月が経過しました。現時点で約120名がPRENECに登録しています。

便潜血反応検査も順調に始動しており、陽性者への大腸内視鏡検査がスタートしています。しかしながら、エドアルド・ペレイラ病院内の内視鏡センターの改修が間に合わず、現段階では、内視鏡検査対象者をCLCへ運ぶバスが運行され、CLCの大腸肛門科の医師が内視鏡を実施しています。これにより、約20名が、内視鏡検査を実施済みです。また、病理組織診断もCLCの施設内で行っており、この業務には、LACRCスタッフの河内講師が携わっています。

なお、エドアルド・ペレイラ病院内の内視鏡検査センターの改修は、長期間に渡る見通しのため、同病院の陽性者に対する内視鏡検査及び病理組織診断は、今年度いっぱいCLCが担当する予定です。

首都・サンティアゴのサン・ボルハ病院でのPRENECは8月からスタートする予定でしたが、内視鏡センターの改修計画に遅れが生じており、早期のスタートを目指して準備中です。

広がるPRENECの輪

第4州のラ・セレナのショッピングモールにて、6月21日より3日間、大腸癌検診フェアが開催されました。このフェアは、ラ・セレナのメガ・サルーン病院とラ・セレナ・カトリカ大学主催で開催され、CLCの大腸癌の模型を用いて来院者到大腸癌の早期発見・予防を訴えました。また、CLCからは、ロペス医師(PRENECプロジェクトリーダー)を始め、総勢25名の医師・看護婦が、現地を訪れ、大腸癌に関する最新の研究成果報告や、便潜血反応検査キットの使用法のレクチャー等を行いました。結果、この期間中には約500人がiFOBTを用いた大腸癌スクリーニングを実施しました。なお、ラ・セレナは、来年よりPRENECに参加する予定で、現在、サテライトプロジェクトを計画中です。

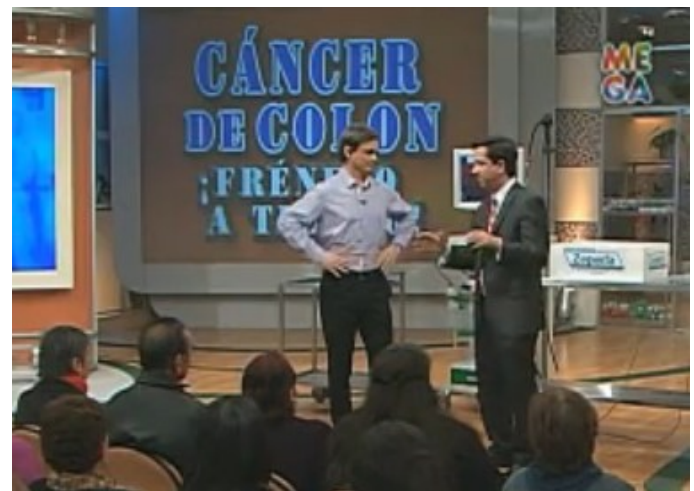
また、CLCの主導のもと、チリ全土にPRENECのメディアプロモーションが展開されています。7月4日には、大腸癌についての知識を広めるため、チリの主要テレビ局であるMEGAVISIONの医療情報番組「Dr.TV」(月～金、午前11:30～13:30)にロペス医師が出演しました。番組内ではPRENECが取り上げられたほか、日本式の便潜血反応検査や、豚の腸を使用した内視鏡検査の実演等が行われ、大腸癌やその治療法が分かりやすく紹介されました。



大腸の模型の中で、大腸癌について説明する看護師(バルパライソ)



便潜血反応検査キットの使用法の説明をするCLCの看護師(ラ・セレナ)

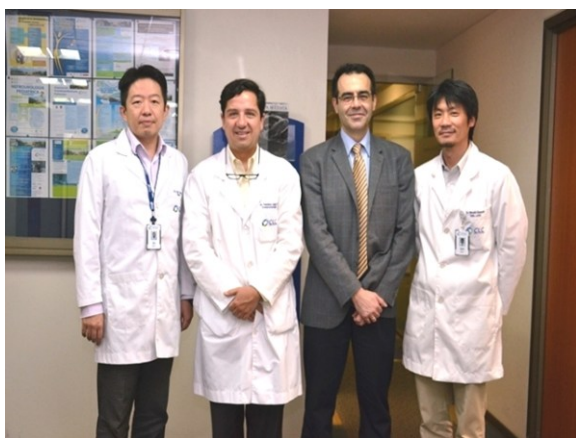


医療情報番組「Dr.TV」の様子(参照: www.mega.cl/programas/dr-tv/)

活動報告

パラ医師、LACRC訪問

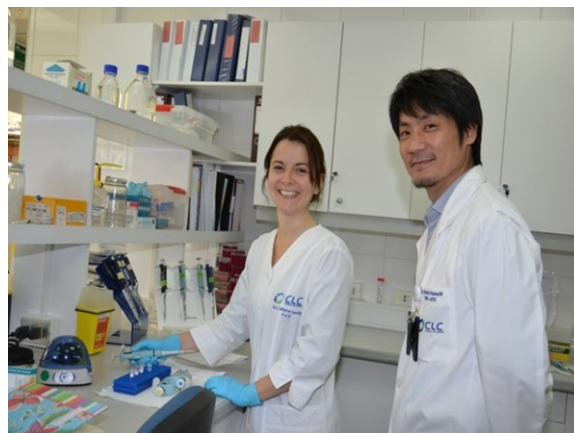
本年3月よりカトリカ大学の消化器内科准教授として招聘されているスペインのアドルフォ・パラ医師がLACRCオフィスを訪問されました。パラ先生は、日本に留学し、約2年間、本学の第一病理学教室（当時：中村恭一教授）に所属されていたことがあり、本学との関係が深く、今後のLACRC活動にご協力いただける予定です。



LACRCにて（田中助教、ロペス医師、パラ医師、河内講師）

前立腺癌共同研究スタート

CLC前立腺癌研究室のラモス医師およびサンチェス研究員とLACRCとの間で、前立腺癌と*P.acnes*（アクネ菌）との関連を明らかにするための共同研究がスタートしました。本学人体病理学分野の主研究テーマであるアクネ菌をターゲットとした研究手法がチリでも活かされることが期待されます。



前立腺癌研究室にて（サンチェス研究員、河内講師）

カトリカ大学訪問

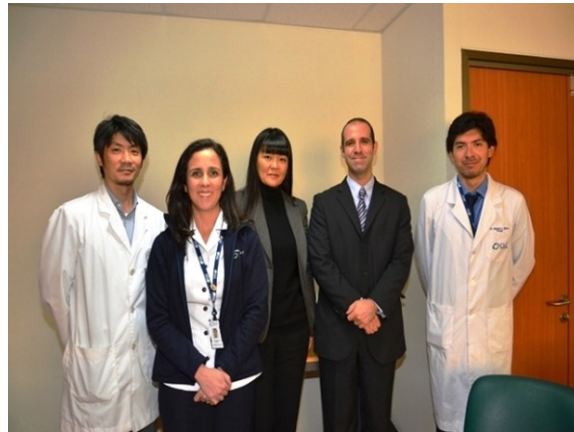
LACRCオフィスの河内講師と田中助教が、カトリカ大学病院を訪問しました。アドルフォ・パラ医師による案内で、院内を視察し、大腸内視鏡検査に立ち会いました。今後、LACRCの活動をチリ国内で積極的に行うためにも、カトリカ大学との連携を深めてまいります。



パラ医師による大腸内視鏡検査の様子

AGCI、LACRCを訪問

チリ外務省外郭団体で、国際協力事業の支援を行うAGCIのエンリケ・ユリ氏が、JICAチリ支所の小林支所長代理とともに、LACRCを訪問されました。日本のJICAに相当する組織であるAGCIとLACRCは、今後の活動に対して、協力体制を構築してまいります。



JICA小林氏（左から3番目）、AGCIユリ氏（右から2番目）

CLC News!

ラテンアメリカ共同研究拠点 (Latin American Collaborative Research Center: LACRC) がオフィスを構えるCLCの最新情報をお伝えしています。本号と次号では、現在建築中の新病棟について、ご紹介いたします。

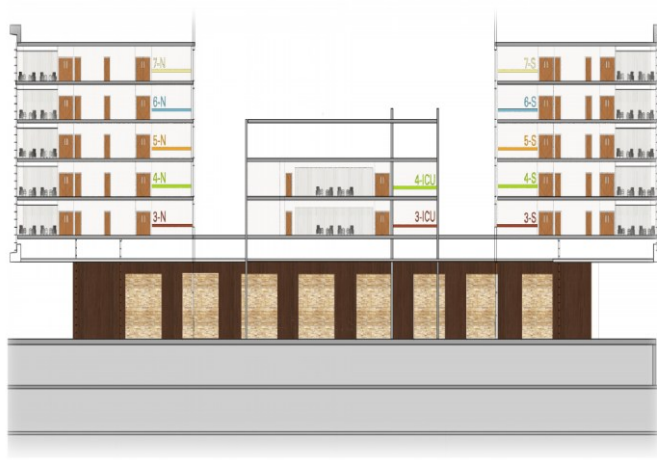
病床・手術室が倍増

CLCでは昨年より総工費1.8億米ドルを掛けて、新たな病棟を3棟建築中です。現在、CLCの敷地内(約93,958m²)には、4つの病棟が存在します。その中には、手術室14室、入院病床が253床あり、年間で2万人以上の患者が利用しています。日本の病院と比較すると、CLCの病床数は決して多くはありませんが、病床は全て個室で、その広さは日本の病室の2倍ほどの大きさです。また各部屋には、液晶TVやシャワーが設置されているほか、Wifi環境も完備されており、入院患者はホテルに匹敵するサービスが受けられます。また、面会は24時間可能となっています。

2020年に完成予定の新病棟は、7階建ての3棟のうち2棟が入院病棟として、260の病床を構え、残りの1棟は19の手術室や集中治療室などが設置される手術棟となります。完成後には、現在の2倍の患者を収容し、手術室も倍増することになり、CLCはチリにおいて更に重要な医療拠点となります。なお、2013年中には、建物の建築が一部完了し、新病棟の一部が開放され、56の病床、8つの手術室(通常手術室7室、循環器専用手術室1室)、前処置、回復室が17床、集中治療室が16床が使用開始される予定です。



新病棟完成後のCLC全体イメージ



新病棟の断面図

編集後記

新病棟の建築現場は、LACRCオフィスの目の前であることもあり、毎日その進行状況を眺めております。2020年は、まだまだ先ではありますが、完成がとても楽しみです。今後もNewsletterを通じて、近況をご報告してまいります。皆様からご意見・ご要望等がございましたら、お気軽にLACRCオフィスまでご連絡くださいませ。(四宮里枝子)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 4, July 2012

[発行日] 2012年7月31日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: rshinomiya@clc.cl

Newsletter

No. 5 September 2012

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

独立記念日

19世紀、中南米の国々がスペインの植民地から次々と独立を果たしました。チリでも1810年9月18日(日本は江戸の世、文化文政時代の頃)にスペインによる植民地統治を拒否し自治政府の設立が決議されました。その後スペイン勢力との独立戦争を経て、初代大統領ベルナルド・オイギンスが独立宣言を果たしたのは1818年2月12日のことですが、チリでは自治政府が設立された9月18日が独立記念日となっています。この日は通称ディエシオーチョ(dieciocho: スペイン語で18を意味する)と呼ばれ、翌日の陸軍記念日や前後日を含め大型連休となります(今年は土日を併せて5連休でした)。気候も徐々に春らしくなる時期でもあり、国を挙げてお祭り気分になってきます。旅行に出かける人も多く、サンティアゴも静かになります。ちょうど日本におけるゴールデンウィークのような雰囲気でしょうか。サンティアゴ市内では大型の公園などでお祭りが開かれ、市内にいる人々の楽しみとなっています。我が家も公園でのお祭りに赴き、飲食やイベントを楽しみました。世界のどこにいても屋外で飲む冷えたビールは最高であることを改めて実感した次第です。

ニュースレター第5号では、8月に行われた東京医科歯科大学ミッション団のチリ・エクアドル訪問、進行中の大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)、新スタッフの紹介等を中心にLACRCの活動をお伝えしてまいります。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



サンティアゴの公園にて開催されたお祭りの様子



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENEC最新情報	2
活動報告	3
Staff (小林助教)	7

PRENEC最新情報

LACRCのメインミッションであるPRENECの最新情報をお伝えいたします。このプロジェクトは、第5州のバルパライソ、第12州のプンタ・アレナスにおいて、それぞれ年間3,000人、サンティアゴにて10,000人を対象とした免疫学的便潜血反応検査（以下、iFOBT）を計画しています。

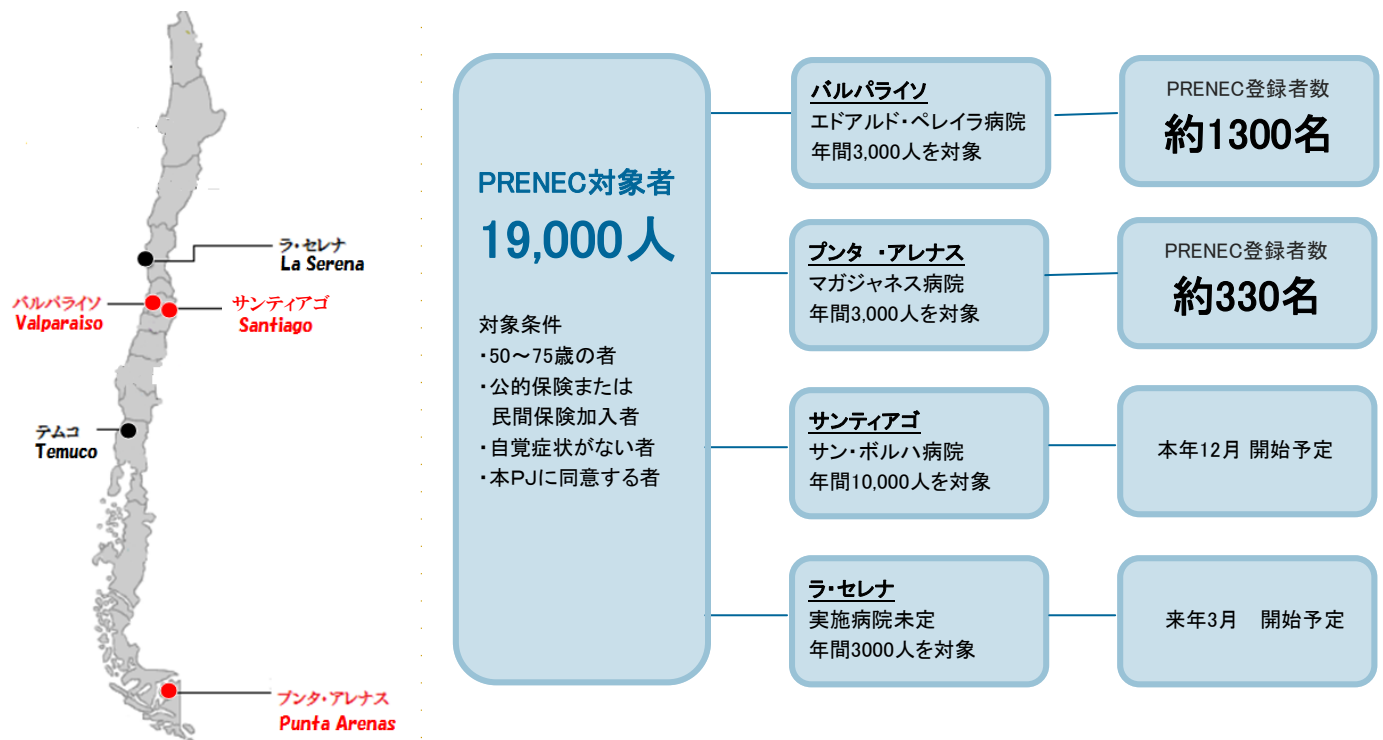
地方でのPRENECの進捗報告

バルパライソのエドアルド・ペレイラ病院とプンタ・アレナスのクリニカ・マガジャネス病院（以下、マガジャネス病院）では、本年5月よりPRENECがスタートしています。

マガジャネス病院では、本取り組みが現地マスメディアに大々的に取り上げられたこともあり、2ヶ月で500名以上が登録済みです。以後も、順調に登録者数が増えており、9月末時点で約1300名が登録し、約1200名がiFOBTを終了しています。そのうち、陽性者もしくは家族歴を有する60名に対し大腸内視鏡検査が実施されており、約半数の患者にポリープが見つっています。なお、現在までの登録者数の伸びを考慮すると、本年度中には計画していた3000名の便潜血反応検査が終了する予定です。これを受け、来年度もプンタ・アレナスにおいてPRENECを展開できるよう、本プロジェクトの責任者であるCLCの大腸肛門科のロペス医師がマガジャネスの政府高官と交渉に入っています。

エドアルド・ペレイラ病院においては、プロモーション活動が少なかったこともあり、周辺住民にPRENECが十分認知されておらず、登録数はまだまだ少ないのが現状です。現時点では、登録者は約330名、iFOBT実施者数は約250名となっています。今後も、CLCの協力のもと、プロモーションを行うなど、登録者数を増加させる取り組みを進める予定です。

また、ロペス医師は、PRENECの参加を検討する第8州のテムコを訪問し、現地でのプロジェクト立ち上げをアドバイスしています。また第4州のラ・セレナにおいては、来年3月にプロジェクトがスタートする予定です。



活動報告

本学の大野喜久郎理事、江石義信教授、杉原健一教授、河野辰幸教授、宮崎泰成教授、吉田丘特任教授からなる訪問団が、8月19日から25日まで、チリ共和国に滞在しました。今回の訪問では、Clinica Las Condesで開催されたSimposio Internacional ENDOSUR(国際シンポジウム、以下ENDOSUR)への参加や、PRENECの進捗確認及び今後の展開のための各種機関との面会を実施しました。また訪問団は、チリ滞在后、エクアドルを訪れ、INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON GASTROINTESTINAL TUMORS(胃腸腫瘍に関する国際シンポジウム)に参加しました。

ENDOSURへの参加



CLCで開催されたENDOSURに、本学の大野理事、江石教授、杉原教授、河野教授、LACRCスタッフである河内講師、田中助教が参加し、11の発表やパネルディスカッションの講師を務めました。

約250名が参加したENDOSURは、CLCが主催し、チリ保健省やチリ大学、チリ消化器病学会ならびに本学が後援する国際シンポジウムです。今年度は、日本を始め、米国や欧州から13名の医師が講師として招かれ、大腸疾患に関する講演や最新の研究発表を行いました。また、南米各国の大腸肛門専門医も参加し、各国での現状と課題や最新動向を紹介しました。

なお、PRENECを推進するCLCの大腸肛門科は、ENDOSURにて、地方の2拠点で実施されているPRENECの取り組みを紹介するとともに、国内外にPRENECへの参加を呼びかけました。



大野理事による講演の様子



参加者で賑わう会場の様子

新たなプロジェクトの事前調査

チリ国にて肺癌早期診断プロジェクトを準備中のCLC呼吸器外科クラベロ医師の要請に応じ、訪問団の宮崎教授が、日本における肺癌の早期診断技術の紹介や意見交換を行いました。本学は、国際社会への医療貢献として、中南米での医療技術移転・研究活動を展開していることから、今後も技術指導等にて支援を続けていく予定です。



プレゼンテーションを行う宮崎教授



プロジェクトチームとのミーティングの様子

プロジェクト関係各所への訪問

PRENECの進捗確認及び今後のプロジェクト展開について調査するため、訪問団は、保健省や外務省・AGCIを訪問し、活動の在り方等について協議しました。また保健省直轄のサン・ボルハ国立病院や、チリ大学、在チリ日本大使館、JICAチリ支所等を訪問・視察しました。



保健省を訪問



外務省と外務省の外郭団体であるAGCIを訪問



サン・ボルハ病院の日智消化器病研究所(中央:ペドロ・ジョレンス医師)



CLCの腫瘍学・分子遺伝子学研究所とのミーティングの様子



チリ大学医学部バルディ副医学部長を訪問



在チリ日本国大使主催の訪問団歓迎夕食会での記念撮影



カトリカ大学病院の消化器内科アレッセ教授・パラ准教授を訪問



JICAチリ支所訪問

エクアドル訪問

訪問団とLACRCスタッフは、8月27日にエクアドルの首都キトで開催されたINTERNATIONAL SYMPOSIUM ON GASTROINTESTINAL TUMORSに参加しました。このシンポジウムは、エクアドル保健省が主催し、本学が後援しているエクアドル初の胃腸腫瘍に関するシンポジウムであり、本学訪問団が講師として各種発表を行いました。

またエクアドル政府の要請により、本学訪問団は、「エクアドル国保健省・東京医科歯科大学間の大腸癌スクリーニングの実施のための覚書」を締結いたしました。エクアドルでは近年、大腸癌による死亡率が増加傾向にあります。この現状を鑑み、首都キトにあるパブロ・アルトゥーロ・スアレス病院において、大腸癌早期発見のパイロットプロジェクトが計画されており、本学はこのプロジェクトをサポートしていく予定です。具体的には、LACRCスタッフを中心とした学術・技術支援や、研修コースの実施等に取り組んでまいります。



国際シンポジウムの様子



在エクアドル日本国大使主催の訪問団歓迎夕食会での記念撮影



パブロ・アルトゥーロ・スアレス病院を訪問



パイロットプロジェクトの責任者であるモンタルボ医師との記念撮影

Staff

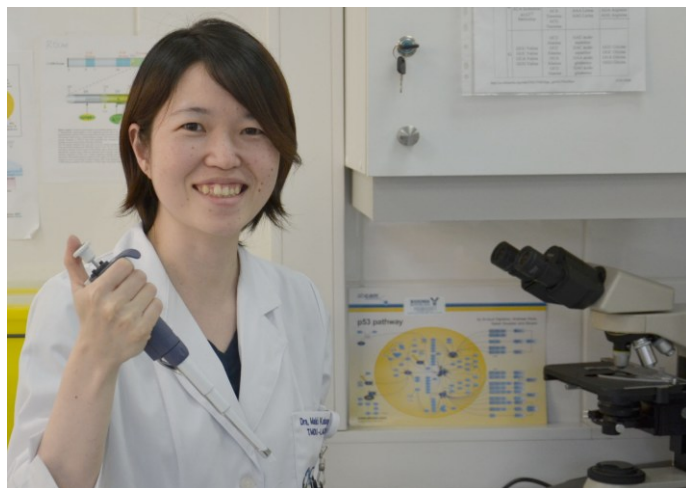
JICA・JSPS科学技術研究員として、新たにLACRCオフィスへ小林真季助教が着任いたしました。小林助教は、約2年間に渡り、本オフィスを拠点に研究活動を行う予定です。

着任挨拶

小林真季 LACRC 人体病理学分野 助教

8月に東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点(LACRC)に赴任いたしました人体病理学分野小林真季と申します。日本国際協力機構(JICA)科学技術研究員(分子病理学・分子生物学専門家)としての派遣になります。こちらでは、「チリにおける大腸癌の環境的および遺伝学的危険因子についての研究」に従事するとともに、LACRCにおける大腸癌集団検診プロジェクト、プロジェクトセメスターの受け入れ、ラテンアメリカ諸国との連携等の推進にチームの一員として微力ながら寄与できればと思っております。

チリに到着してから2カ月になります。“南米”＝“南国”をイメージしがちですが、サンティアゴは緯度33度で、日本の高知県あたりの緯度に位置しております。春・秋は短いものの四季があり、日本の夏の時期はサンティアゴの真冬にあたります。東京を出発したのが7月末、つまりこちらの真冬です。気温37℃の東京から30時間、降り立ったサンティアゴ空港は5℃以下。いきなりの30℃以上の気温差に心身ともに引き締まる思いでした。そんな思いで始まったチリでの生活ですが、こちらの人々はとても温かく、笑顔で迎え入れてくれました。チリ人は挨拶をととても大事にしているようで、知り合いでなくても“Hola!!(オウ)”と挨拶をしてくれます。こちらも自然と笑顔で“Hola!!”とかえす習慣が身につきました。良好な人間関係は挨拶から始まることをこちらで改めて学んだような気がします。約2年間の赴任予定ですが、チリ流に笑顔とオウオウ主義で、研究に、プロジェクトに、日々全力で取り組んでいこうと思います。



CLCの腫瘍学・分子遺伝子学研究所にて

編集後記

訪問団に同行する中で、PRENECプロジェクトを支援して下さる様々な方とお会いすることができ、PRENECは沢山の方々に支えられているプロジェクトだということを改めて感じる機会に恵まれました。今後とも、このLACRC Newsletterを通じて、LACRCオフィスの近況をご報告してまいりますので、今後の誌面にあたり、皆様からご意見・ご要望等がございましたら、お気軽にご連絡くださいませ。(四宮里枝子)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 5, September 2012

[発行日] 2012年9月28日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: rshinomiya@CLC.cl

Newsletter

No. 6 November 2012

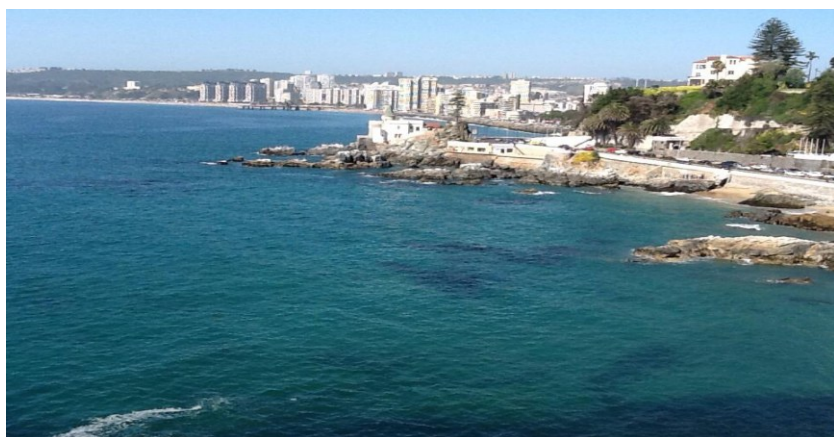
東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

夏到来

日本は晩秋の頃、これから冬を迎えるところと思いますが、南半球に位置するこちらチリでは、いよいよ夏がやってきます。チリの夏は日本とは異なり湿度が低く、大変過ごしやすいのですが、一方晴れた日には陽射しがとても強く感じます。オゾンホールがチリ・アルゼンチン南部にかかって存在しているとのことで、紫外線量は日本の6倍という説もあります。チリ気象庁(Dirección Meteorológica de Chile)では毎日紫外線量(UV-B)を測定し公表しています。サンティアゴではこの10日間ほど、最も紫外線量が高度であるExtremo(極度)となっており、日中の外出を避ける、外出する場合は日陰を探す、長袖シャツ・サングラス・帽子の着用、日焼け止めクリームの使用、などが気象庁により推奨されています。最近まで爽やかな夏の到来に浮かれていましたが、このような話を聞き空恐ろしくなっているところです。

チリニュースレター第6号では、11月に行われた東京医科歯科大学ミッション団のチリ・パラグアイ訪問、進行中の大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の報告を中心に、LACRCの活動をお伝えしてまいります。また今号より10月にスタートした医学科4年次プロジェクトセメスター学生によるチリ滞在記もお届けいたします。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



リゾート地「ビーニャ・デル・マール」



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENEC最新情報	2
TMDUとチリ	4
活動報告	5
プロジェクトセメスター	7

PRENEC最新情報

本年5月に開始されたラテンアメリカ共同研究拠点（Latin America Collaborative Research Center, 以下LACRC）のメインミッションであるPRENECの最新情報をお伝えいたします。PRENECでは、第5州のバルパライソ、第12州のプンタ・アレナスにおいて、それぞれ年間3,000人、サンティアゴにて5年間で2万人を対象にiFOBTによる便潜血反応検査を実施することになっています。

サンチアゴでの拠点となる内視鏡センターがオープン

サンチアゴにおけるPRENECは、サン・ボルハ病院の日智消化器病研究所にて展開されることになっています。この研究所には、既に内視鏡センターが設置されていますが、PRENECの中心拠点として利用するため、8月より改修工事を開始し、10月末には工事が完了、11月20日に新内視鏡センターのオープニングセレモニーが開催されました（次項）。

サンチアゴでは、この新内視鏡センターで大腸内視鏡検査が行われる予定ですが、サン・ボルハ病院では、通常の検査も現在1,000人の待機患者が発生している状況です。また、チリ国内全体でも同検査を実施できる医師が少ないという問題が存在します。

この現状を打開するため、今回開設されるセンターはPRENECの拠点となるだけでなく、チリ保健省からの支援を受けた内視鏡医育成の場として稼動することになっています。研修期間は3ヶ月間で、シュミレーターによるトレーニングのほか、大腸内視鏡検査を指導医の下で実施することになります。研修は、日智消化器病研究所所長のエステラ医師、CLC大腸肛門科のクロンバーク医師のほか、LACRCの田中助教が指導医となり、大腸内視鏡検査の診断ができる医師を年間8名ずつ育成していく計画です。

新内視鏡トレーニングセンター

目的：大腸内視鏡医の育成カリキュラム

- ・トレーニング
 - －シュミレーターによるトレーニング
 - －内視鏡診断技術の習得
- ・実習
 - 大腸内視鏡検査100件の実施
 - －観察＋報告書の作成（30件）
 - －指導医の監督の下、引き抜き（30件）
 - －指導医の監督の下、挿入＋引き抜き（40件）
- ・内視鏡医認定の必須条件
 - －盲腸までの挿入（90%以上）
 - －引き抜き時間（8分以上）
 - －PRENEC基準に基づいた報告書の作成



改修工事が終了した新内視鏡センター



内視鏡ブース内部の様子

新内視鏡センター 開所式

去る11月20日、新内視鏡センターの開所式が執り行われました。開所式には、村上秀徳・駐チリ日本国特命全権大使ならびにチリ保健省、PRENEC関係者など約60人が招待され、本学からは大山喬史学長、江石義信教授（人体病理分野）やLACRCスタッフが出席いたしました。

当日は、チリ保健省医療ネットワーク局長のカステージョ医師からの祝辞を賜り、「新内視鏡センターがチリだけではなく、ラテンアメリカにおける内視鏡医育成の最先端の場になるようにチリ保健省としても協力を惜しまない。」と述べられました。

また、JICA（日本国際協力機構）チリ支所、サンチャゴ日本人学校、日智商工会議所からも関係者が出席されました。

なお、同時にサン・ボルハ病院のロブレス病院長、CLCのデヒアス病院長、プンタ・アレナスのクリニカ・マガジャネス病院（以下、マガジャネス病院）のバルナバ医師、バルパライソのエドアルド・ペレイラ病院（以下、ペレイラ病院）のベレンゲル副病院長が「PRENEC推進のための協力枠組協定」を締結し、今後のPRENECへの更なる支援体制の確認を行いました。



PENEC推進のための協力枠組協定に署名するロブレス病院長

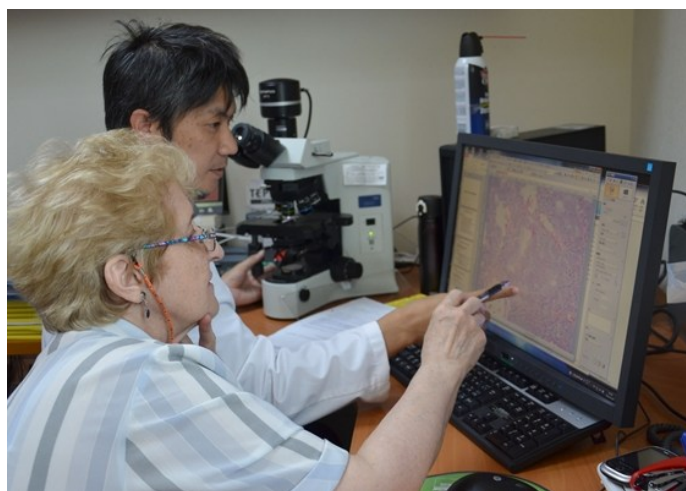


新内視鏡センターを見学する関係者

地方でのPRENEC

第12州プンタ・アレナスのマガジャネス病院では、プンタ・アレナスから北へ246km離れた場所にあるプエルトナタレスで、PRENECのキャンペーンを行いました。この町は、近辺に世界的に有名なパタゴニア国立公園が存在することから、観光業が発達しており、現在約1万9000の方が生活をしています。マガジャネス病院のPRENECチームは、2日間で約260名のPRENECの登録を行い、うち250名がiFOBTを終了しています。この結果、プンタアレナスでは、約2000名がPRENECに登録済みとなりました。

PRENECスタートから5か月が経過し、診断・治療方針についてディスカッションが必要なケースも増えてきています。そこで、定期的にペレイラ病院、マガジャネス病院、CLC、LACRCスタッフが参加した症例検討会を定期的に開催しています。症例検討会は現在までに3回開催され、各病院の検討が必要な症例について、ディスカッションを行い、診断・治療方針を決定しています。また、病理分野においては、病理診断の異なるケースを検討するため、各拠点の病理医とLACRCの河内講師による個別ディスカッションがスタートしています。



マガジャネス病院のバステルナク病理部長と河内講師によるディスカッション

寄稿：TMDUと私

1968年に本学の村上忠重教授(当時)がチリを始めて訪問したことをきっかけに、東京医科歯科大学とチリの40年以上に渡る交流が始まりました。特に、村上教授が創設したサン・ボルハ病院の日智消化器病研究所では、現在でも村上教授の教えを継いだ医師たちが活躍しています。本号では、日智消化器病研究所の所長であるリカルド・エステラ医師にご寄稿いただきました。

リカルド・エステラ医師 日智消化器病研究所 所長

日智消化器病研究所は、チリ人医師ペドロ・ヨレンス博士により、1978年に胃癌診断センターとして設立され、1990年には消化器病研究所としての役割を担うことになりました。この研究所は、サンチアゴの中心地に位置する公立病院であるサン・ボルハ病院内に設置されていますが、設立にあたり、日本政府に多大なる援助を受けることができました。おかげで、研究所は、長年にわたり最新の設備を維持しており、また日本人医師が講師として研修を行い、チリ人の医師だけでなく、ラテンアメリカ中の医師がトレーニングを受けることができました。この研修で培った交流の輪は今でも続いています。特に、チリの消化器疾患に大いなる貢献をしてくださった清成秀康先生、小池盛雄先生、渡辺英伸先生を忘れることができません。

また、東京医科歯科大学第一病理学の中村恭一教授(当時)は、日本との数々のプロジェクトのコーディネーターとして手腕を発揮され、後年、チリ政府より「ベルナルド・オヒギンズ勲章」の叙勲を受けられました。また中村教授は2011年にチリを再訪されたので、本研究所以り功労者賞を授与させていただきました。

2010年1月27日に、東京医科歯科大学、チリ保健省、CLCの間で、「大腸癌診断国家プログラム及びパイロット・ステージ・プロジェクトの実施に関する協定」が締結され、日智消化器病研究所はプロジェクトにおいて、サンチアゴにおける内視鏡センターとしての役割を担うこととなりました。(地方においては、プンタアレナスのマガジャネス病院、バルパライソのベレイラ病院が内視鏡センターとして稼働しています)。このプロジェクトでは、中村教授の教え子である江石義信教授とCLCの大腸肛門科チーフのフランシスコ・ロペス医師が中心となりスタートしています。こうして、長年の交流を経て、再び東京医科歯科大学とタッグを組むこととなりました。協定調印後には、日智消化器病研究所に2名の東京医科歯科大学の医師が派遣されています。2011年には西蔭徹郎医師が赴任し、日本式の治療技術を指導してくださいました。現在は、田中浩司医師が後任として、本研究所以で活躍されています。本プロジェクトでは、早期スクリーニングだけではなく、チリまたラテンアメリカにおける内視鏡医の育成にも取り組んでいます。過去の胃癌早期診断プロジェクトの成功が、現在の大腸癌早期診断プロジェクトの出発点となったのです。

このように、日智消化器病研究所と東京医科歯科大学は、長年にわたり、関係を深めています。今後もこの交流は続き、互いの学術・医療において、更なる発展につながっていくと自負しています。

(翻訳：四宮)



略歴：

チリ大学医学部を卒業後、チリ国営銅公社コデルコに医師として勤務。チリ北部エリアのメディカルディレクターとなり、チリ全土のメディカルディレクターに就任。1995年にコデルコを退職後、日智消化器病研究所の消化器科医となる。2006年、日智消化器病研究所所長 就任。



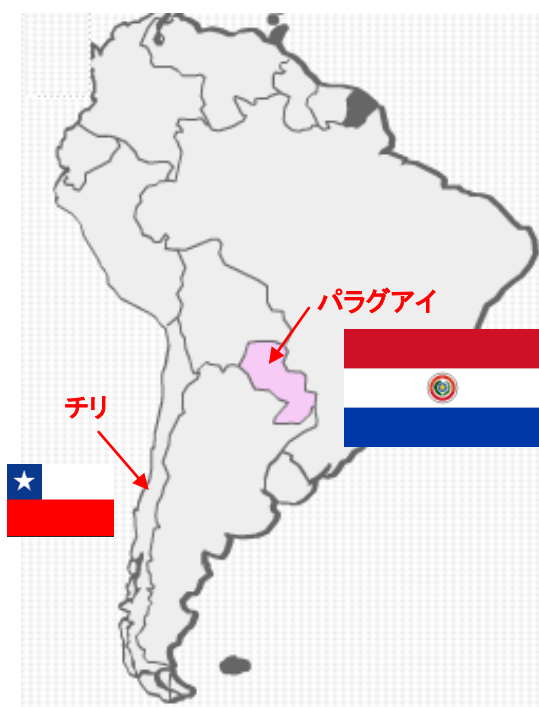
来日した際の記念写真

エステラ医師は、1997年にJICA主催の「早期胃癌と関連腫瘍コース」の研修生に選ばれ、本学の河野辰幸教授(食道・一般外科学分野)の元で研修を受けられています。この研修について、リカルド医師は「素晴らしい技術と教育システムに感銘を受けたことを今でも覚えています。特に河野先生を始め、遠藤光夫先生、竹下公矢先生、斎藤直也先生には大変お世話になりました。」とコメントされました。

活動報告

パラグアイ訪問

本学の大山喬史学長、江石義信教授、吉田丘特任教授からなる訪問団が、11月22日から26日まで、パラグアイ共和国に滞在しました。今回の訪問は、大腸癌による死亡率の増加を危惧するパラグアイ政府が、本学とCLCが実施している大腸癌早期診断プロジェクトに興味を示し、本学との面会を要請されたことにより実現したものです。パラグアイでは、フランコ大統領と面会したほか、アルボ保健福祉省大臣とのディスカッションや、アスンシオン国立大学やクリニコ公立病院などが行われました。



パラグアイの基礎情報

- ・首都 :アスンシオン
- ・言語 :スペイン語
- ・人口 :6,349,000人
(うち日系人は10,321人)
- ・大統領 :フェデリコ・フランコ大統領
(大統領は元心臓外科医)



パラグアイのフランコ大統領(左から2番目)と会談



アルボ保健福祉省大臣とのディスカッション

また、日本大使館やJICA支所の訪問、パラグアイ日系医師会関係者との会合などを重ね、情報収集を行いました。なお、本学のパラグアイ訪問は現地メディアにも取り上げられました。今後もパラグアイ政府とのディスカッションを重ねつつ、本学の中南米拠点であるLACRCからどのような支援が出来るのか 検討し、パラグアイでの大腸癌早期診断プロジェクト構築に協力していく予定です。



アスンシオン国立大学を訪問

Con apoyo japonés, pacientes accederían a colonoscopias gratis

Especialistas de Tokio participaron de la presentación del Programa de Lucha contra el Cáncer en el país, con la intención de conocer y brindar capacitación y recursos económicos para la detección precoz del cáncer de colon.

...
Ayer fue presentado oficialmente el Programa de Lucha contra el Cáncer en Paraguay «crisis» en octubre pasado que busca contar con los recursos necesarios tanto de insumos como especialistas para la detección precoz de la patología que es prevenible. El cáncer del colon a nivel mundial tiene una detección temprana en el 60% de los casos, lo que genera gastos y tratamientos costosos para el paciente. El programa tendrá como funciones esenciales formar recursos, priorizar acciones de prevención y asegurar el acceso a tratamientos en el territorio nacional. Informó el ministro Antonio Arco, durante un taller sobre la situación del cáncer de colon en Paraguay. El doctor Juan Carlos Abarrategui fue designado como encarga-

do de la implementación. Una delegación de especialistas del Japón participó de la presentación con la intención de brindar apoyo técnico y capacitación de médicos que se encargan de los estudios necesarios, con entusiasmo para cumplir con el programa. El día de la visita a Tokio y si se tiene la aprobación, encargarán a Paraguay para firmar un convenio con el Ministerio de Salud Pública (MSP), para poder poner en práctica esto que será un beneficio demandado importante para el país», afirmó Flores.

Los especialistas solicitaron el acompañamiento científico para la justificación del proyecto y rendir el apoyo de la Sociedad Paraguaya de Gastroenterología y la Sociedad Paraguaya de Ginecología, así como de la Facultad de Medicina de la Universidad Nacional de Asunción (UNA).



Presentación. Una delegación de japoneses participó del lanzamiento del programa.

El 90% se cura si la detección es temprana

Según la actualización en el diagnóstico y tratamiento del cáncer de colon hasta el 2007, existen 446 pacientes con cáncer de colon en Paraguay. El 54% de los pacientes proceden del interior del país y el 46% son de Central y Sur. El 47% son mujeres y el 53% varones. Un 27% de las operaciones se realizaron por urgencia y 73% fueron programadas. El 90% de los diagnósticos se da en pacientes mayores de 50 años. El 50% se cura si se diagnostica en etapa temprana, según los especialistas. El cáncer de colon ocupa el primer lugar de muerte por cáncer del tubo digestivo, empieza con un grano de nomenclado «pípolo» que se convierte en un cáncer. Ocurre un pequeño sangrado que por lo general aparece a una hemorroides y anuncia y en estado tardío se trata. Este se diagnostica a través de la colonoscopia, con la intención, a través del año de todo el intestino grueso y se halla un tumor se envía para su análisis. Tras el procedimiento el patólogo es el que determina si es un cáncer. De la etapa del pípolo al cáncer hay un período de 10 años, sin embargo, la detección ya se realiza en etapas avanzadas de la enfermedad.

COSTOSO. En los hospitales públicos el estudio es gratuito pero el paciente debe aguardar en una lista de espera por días, meses en el sector privado, el costo promedio los C. 1.200.000.

El tratamiento del cáncer de colon, una vez diagnosticado, depende de la etapa del tumor, en el caso del cáncer de recto necesita quimioterapia y radioterapia por lo que se realiza en cinco fases.

本学訪問団に関する現地メディアによる報道

チリ訪問

訪問団は、11月19日から21日まで、チリ共和国に滞在しました。今回は、日智消化器病研究所の新内視鏡センター開所式への出席や、大腸癌集団検診プロジェクト (PRENEC) の今後の展開のため、CLCのCEOやチリ保健省との面会を実施しました。また、プロジェクトセメスターの学生による第一回進捗ミーティングや、大使公邸での夕食会などにも参加いたしました。



学生による第一回進捗ミーティング



大使公邸夕食会での記念撮影

プロジェクトセメスター学生チリ滞在記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣しており、LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。今年度も、10月11日に6名の学生がチリに到着いたしました。このうち3名がCLC、3名がチリ大学の研究室に所属しています。本号より、3号に渡って、学生のチリ滞在記をお届けいたします。

遠い異国の地で

田代 燦 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属

10月にチリに到着してから、約1ヶ月ほどが過ぎました。南半球に位置するサンティアゴは、到着直後は肌寒かったものの、ここ数週間は着実に暖かくなっていて、我々はまさに本年2回目の夏を迎えようとしています。まだチリで生活し始めてから1カ月しか経っておりませんが、非常に密度の濃い生活を送ることができており、毎日が新たな出会いと発見、そして驚きの連続です。

まずは僕の所属する研究室、および今までの研究の経過について簡単に紹介したいと思います。CLCにて初めて担当教官との顔合わせが終わった次の月曜日からは、本格的な研究室配属生活が始まりました。最初の1週間でやることは、知識を蓄積すること。さまざまな論文やレビューをあたり、自分のなかで理解を深めていくにつれ、自分の研究テーマに関して今までいかに無知であったかを思い知らされました。その内容について金曜日にSmall Presentationを行い、担当教官といろいろ議論を交わしながら、研究内容を定めていきました。その後デザインしたプライマーが到着するまでの間は、プロジェクトのイントロダクションを書いたり、発表に備えたりと、再びデスクワークが中心となりました。

そんなこんなでようやく実験を開始できるようになると、今度は大山学長、江石教授を迎えての進捗ミーティングが目の前に控えていました。どこの研究室の人も成果などまだ出るはずもなく、実験の概要や方法のみの発表となりましたが、各人若干緊張した面持ちで英語のプレゼンテーションを行い、しかしときに白熱した質疑応答も見せるなど、それぞれにとって大きな収穫があったのではないのでしょうか。発表の夜は非常に楽しい会食となりました。現在は目下、手を動かす実験に従事している最中です。

さて、次にこちらでの生活について述べたいと思います。話すことはおろか、第二外国語としてすらスペイン語を学習したことのない僕たちにとって、身の回りの全てがスペイン語という環境はあまりに過酷でした。最初は、日本とは比べ物にならないほど広いスー



研究室のメンバーとの一枚



大山学長、江石教授との昼食会

パーママーケットで欲しいものを見つけ、それをレジで買う、ということすらままならないレベルでした。暇を見つけてちょっとずつ勉強したりしたおかげか、それとも少しは耳が慣れてきたのか、今では買い物に困ることはあまりなくなりましたが、それでも現地人とスペイン語のみで意思疎通を図ることはまだまだ難しいです。

そんな地球の裏側の国チリですが、日本のイメージはかなり良く、日本語を勉強している学生が数多くいます。特に日本のアニメやドラマの浸透っぷりには目を見張るものがあり、我々日本人より詳しいこともしばしばで驚かされます。また、日本語を勉強しているチリの学生と交流したり、「チリ日本語弁論大会」というチリ人による日本語でのスピーチコンテストといったものを見に行ったりすることで、母国を別の角度から眺めるとはこういうことか、と気付かせられます。チリの友達とお互いにスペイン語と日本語を教えあい、どちらも困ったときは英語、というのがだいたい、これからもこの素敵な関係を大事にしていきたいなと思います。

では、まだサンティアゴでの滞在は始まったばかりですが、残りの時間も有意義に過ごしていきたいと思います。



チリ人の友人との勉強会の様子

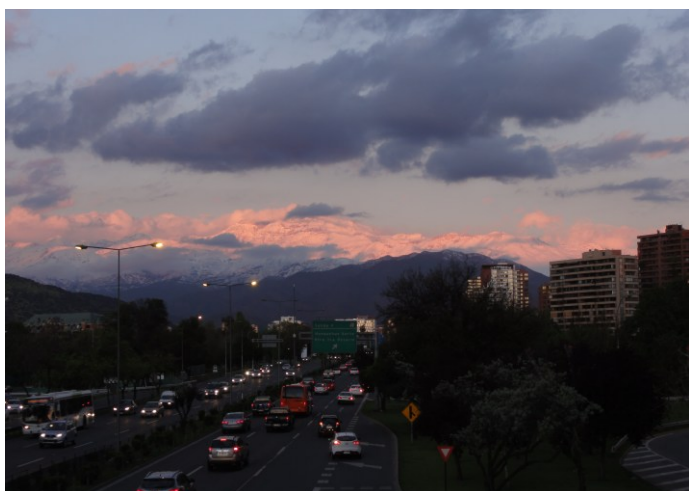
沢山の方に 支えられたチリ生活

秋山太郎 チリ大学医学部自然免疫学研究室所属

皆様こんにちは。私は現在チリ大学で自然免疫学の研究をしているマルセラ・エルモーン教授の研究室に所属し、潰瘍性大腸炎におけるIL-33の役割についての研究に携わっております。私の研究には、手術で得られた大腸の断片が必要で、なかなか研究は捗りませんが、論文を読んだりしながら日々を研究室の仲間と楽しく過ごしております。

私の研究室には十人弱の人が所属しているのですが、皆とても私に親切にしてくれます。研究室の仲間たちは、異国の地でスペイン語をしゃべれない私が孤立しないように、一緒にお昼や、おやつを買いに行こうと声をかけてくれたり、放課後にサッカーに誘ってくれたり、飲みにつれて行ってくれたりします。私が最近研究室の仲間と食べるお気に入りにはソパイピーヤです。ソパイピーヤとは、サンティアゴの路上の至る所で売っている黄色くて丸いあげパンのようなものです。一枚120ペソ(約20円)で、トウガラシのソースやマスタードをかけて食べます。私は毎日おなかが減ったらこれを仲間と買いに行きます。しかし、同じ研究室でコロンビアからの留学生は、ソパイピーヤを食べるようになって一年で5kg太ったと言っていました。太るのが心配です。

チリは日本とは違いサッカーが盛んです。学校の中にも研究室でサッカーチームがあるようで、毎週試合をしているようです。私の



夕陽を浴びるアンデス山脈



指導教官のエルモーン教授と



サンティアゴのフォレスト公園にて



仲の良い友人との夕食会

TMDUプロジェクトセメスターの学生によるブログのご紹介

チリ派遣学生が、自らの研究生活や異文化体験について紹介するブログを開設しています。学生たちの日々の生活が垣間見れる楽しいブログです。是非、ご覧くださいませ。

ブログ名：TMDU Project Semester in Chile!

アドレス：<http://ameblo.jp/tmduchile2012/>



研究室の仲間も二人サッカーに参加していて、毎週熱いバトルを繰り広げております。サッカーチームは四十歳以上の人を二人入れるのが規則らしく、なんとおじさんが果敢にフェイントをかけたりしながら、相手ゴールに迫っています。私は怪我しないかひやひやしながら観戦しています。

サッカー観戦のあと、研究室の仲間は飲みにつれて行ってくれることがあります。場所は仲間の友達が経営している居酒屋で、彼はその常連です。彼にはたくさんの友達がいる、私もその輪に混ぜてくれます。そこでは、ほとんどの人は英語を話しません、酔ってしまえば言語の壁など関係ありません。とにかく盛り上がります。居酒屋でもサッカーネタは尽きません。サンティアゴのサッカーチームでコロコロというチームがあり、そのチームの応援の仕方を教えてくれたりして、一緒に盛り上がります。

週末も、優しい友達は私を遊びに誘ってくれます。ついこの間は、パナマからの留学生にサンティアゴの色々な場所を案内してもらいました。サンティアゴはとてもきれいな街です。Baquedano駅周辺をはじめ、サンティアゴの中心街にはきれいな公園、立派な美術館や建造物、銅像などがたくさんあります。彼らとチリモイヤというチリ固有の果物のアイスクリームを食べながら、これらの場所を散策しました。また、彼らと今度一緒にお互いの国のご飯を作りあって食べよう約束もしました。しかし、彼ら(彼らに限らず)に日本食の何を食べたいか聞きたいといき寿司かラーメンと答えます。どっちも作りようがなく困っております。

私は、チリでたくさんの親切な人々に恵まれ、彼らに支えながら日々を楽しく過ごしております。私にこのような貴重な体験をする機会を与えてくださった、江石先生、河内先生、四宮様をはじめとする東京医科歯科大学の方々と、たくさんの親切で素敵なチリの人々に多大なる感謝をします。ありがとうございます。

編集後記

プロジェクトセメスターの学生到着後、オフィスに活気が溢れています。言葉の壁と闘いながら、研究生活や異文化体験を楽しんでいる学生の様子が、とても微笑ましい毎日です。今後もLACRCスタッフの活動や学生の留学体験記をLACRC Newsletterを通じて、ご報告してまいります。(四宮里枝子)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点 Latin American Collaborative Research Center Newsletter No. 6, November 2012

[発行日] 2012年11月30日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: rshinomiya@clc.cl

Newsletter

No. 7 January 2013

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

夏の年越し、チリ雑煮、大厄Trío

チリに来て初めての年末・年越しを経験しました。チリではクリスマスは家族と静かに過ごす習慣ですが、一方年越しはとても賑やかです。私の住んでいる住宅街でも、年越し直前には街中から歓声が聞こえ始め、カウントダウンが始まりました。新年を迎えた瞬間は、歓声と共にあちこちから花火が打ち上げられました。クリスマスの時期が比較的賑やかで、静かな新年を迎える傾向のある日本とは対称的です(もちろん日本でも新年を賑やかに迎える向きもありますが)。元旦には雑煮にチャレンジしました。我が家では例年、父方の故郷である博多の鰯雑煮を作ります。チリでは鰯が手に入らなかったため、中央市場で見つけた鰹(bonito)と、日本から持参したあごだしを使って“博多風チリ雑煮”を味わいました。

ところで私は、今年大厄を迎えます。赴任前、前厄の年に厄払いをしてきたものの、はたしてチリではどのような運命が待っているのか想像もつきません。実は現在のLACRCスタッフのうち3名は大厄の最中にあります(私以外は後厄ですが)。様々な苦難が訪れること必至ではありますが、一致団結して苦難を打ち砕きたいと誓い合っている次第です。

ニュースレター第7号では、進行中の大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の報告を中心に、LACRCの活動をお伝えしてまいります。また前号に引き続き医学科4年次プロジェクトセメスター学生によるチリ滞在記もお届けいたします。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



本年もよろしくお願いします。(大厄Trío: 小林助教、田中助教、河内講師)



LACRC TMDU
IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENEC最新情報	2
TMDUと私	4
活動報告	5
プロジェクトセメスター	6

PRENEC最新情報

本年5月に開始されたラテンアメリカ共同研究拠点 (Latin America Collaborative Research Center, 以下LACRC) のメインミッションであるPRENECの最新情報をお伝えいたします。PRENECでは、第5州のバルパライソ、第12州のプンタ・アレナスにおいて、それぞれ年間3,000人、サンティアゴにて5年間で2万人を対象にiFOBT(免疫学的便潜血反応検査)を実施することになっています。12月末時点では全拠点で、約2,500名が登録、約2,300名がiFOBTを終了しています。今回は、PRENECに関連して「チリにおける大腸癌の環境的および遺伝学的危険因子」について研究を行っているLACRCスタッフ・小林助教のプロジェクトをご紹介します。

PRENEC検体を用いた研究のスタート

12月よりPRENECの検体を用いた研究がスタートしました。研究環境の構築、物品の購入、納品に要する日数等、様々な事象における日本との相違に七転八倒しながらも、ようやく研究の始動に至りました。

プンタ・アレナスのマガジャネス病院をモデル拠点として、末梢血サンプルおよび大腸組織検体の採取に関するプロトコルの整備、保存・輸送方法の徹底によりPRENEC検体の収集が進行しております。プンタ・アレナスでは予定の3000名のうち現在までに2080名を対象として便潜血反応検査を施行しております。本研究では図に示す通り、そのうち大腸内視鏡を施行する対象者より末梢血サンプル、検査の結果腫瘍を認めた患者より病理組織標本(診断に用いたホルマリン固定パラフィン包埋ブロック)、大腸癌と診断され内視鏡的切除あるいは手術を施行した患者より、可能であれば新鮮凍結組

織を採取する予定であります。

またバルパライソのエドアルド・ペレイラ病院では、既に約450名を対象として便潜血反応検査が施行されております。その便潜血反応陽性率、腫瘍陽性率、癌陽性率はほぼプンタ・アレナスと同様に推移しており、この割合から今後行われる各拠点を合計した20000人の対象者から得られる各検体数を類推すると、末梢血サンプル約2000例、病理組織標本約1000例、大腸癌症例約100例に及ぶものと思われます。

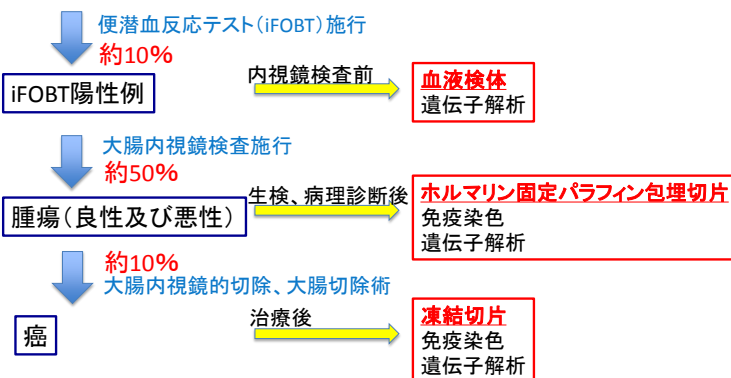
本研究を遂行するとともに、今後の継続的研究を視野に入れこれらの検体のBioBankの構築も現地研究者と協力し進めております。以上、研究の進捗状況は随時このNewsletterで紹介していく予定です。



便潜血反応検査の担当者らと研究所にて

PRENEC Samples

PRENEC対象者



メディア掲載

サンチアゴにおけるPRENECは、サン・ボルハ病院の日智消化器病研究所にて展開されることになっています。田中浩司助教は、LACRC着任当時より、週3日ほどサン・ボルハ病院で、通常の大腸内視鏡検査に携わったり、現地医師への指導を行ったりしています。その様子が、チリの大手メディアであるEl mercurio紙によって取材され、先日、特集記事が掲載されましたので、ご紹介いたします。

チリ生活は11ヶ月、スペイン語のレベルはそこそこ。チリ医療機関に勤務する唯一の日本医師は、辞書とジェスチャーで患者とコミュニケーションを図る。サン・ボルハ病院では、この日本人医師と笑顔溢れる日々を楽しんでいるようだ。

日本人医師である田中浩司医師(41歳)は、サン・ボルハ病院に長年勤務していたかのように廊下を歩いていく。すれ違った患者には笑顔向け、検査室では大腸内視鏡検査を行う。

誰もが、彼と言葉を交わすまでは、チリに長年住んでいると思ってしまう。実際のところ、彼は殆どスペイン語を話せないのだけれども。

田中医師はチリの医療機関に勤務する唯一の日本人だ。毎週火曜、水曜、木曜にサン・ボルハ病院にカバンを抱えて、笑顔でやってくる。内視鏡医としての16年間の経験を買われ、チリ保健省、CLC、東京医科歯科大学が行うPRENECの重要な役割を担うために、田中医師は日本から赴任してきた。

彼の長期目標は、乳がん予防検診のようにPRENECが全国に普及し、チリのAUGE(特定の病気の予防プロモーションを支援する)に登録されることだ。また患者とのコミュニケーションをよりよくしていくという目下の目標もある。

病院のスタッフは、ゆっくり話したり、ジェスチャー・絵などで田中医師とコミュニケーションをとる。「Coomo estaaa? (調子はどう?)」とあるスタッフが声をかけると、笑顔で、けれども少し恥ずかしそうに「bien(上々だよ)」と返事をする。スペイン語で話かけられても、内容はなんとなく聞き取れる。ただ、返事をするのは難しい。取材中も、重要な会議に出席する際と同様に、通訳が同席していた。

患者とのコミュニケーションは、そうはいかない。診察には、辞書を持ち歩く。「こちらを向いてください。」「息を深く吸って。」などのように、辞書には診察中に必須のフレーズや言葉が書き留められている。

同僚の内視鏡医とは、英語やスペイン語を交えながら、日常会話を行っている。サン・ボルハ病院の日智消化器病研究所の所長であるリカルド・エステラ医師は、「不思議なことなのだが、田中医師は皆の言うことは理解しているし、私たちは彼から色々なことを学んでいる。」と語る。

田中医師は、チリの医療施設について、「日本の病院のように、新しい機器が揃っている病院もあり、驚くような古い機械が使われている病院もあります」というが、古い設備であっても、彼の仕事は滞ることはない。「癌は早期に発見すれば治療できるものだ」という。青年時代のある体験から彼が学んだことだ。

田中医師が、まだ医学生だった頃、祖母が乳癌の診断を受けた。悪化する癌を前に、自分の非力さを感じた。この経験が、癌と対峙するエネルギー生み出すきっかけとなった。数年後、今度は従兄弟

Medicina sin palabras

Llevo 11 meses en Chile, pero aún no logro articular una frase en castellano. El único médico japonés que trabaja en el sistema público de salud ha debido crear sus propios diccionarios y jugar a la mímica con los pacientes. Lejos de ser un problema, en el Hospital San Borja se divierten cada día con su doctor más exótico.



Relajo y hace humor con sus pacientes. Tanaka en su sala donde atiende hoy. Tanaka. La sonrisa es su paciente, surge más en medio de una situación incómoda, e inmediatamente comienza las risas.

que todos las conversaciones donde participa terminan en sonrisas cortadas. "Cuando hablo, me quedo en blanco", dice. "Cuando hablo, me quedo en blanco". Tanaka, que habla japonés, se enfrenta a una situación que le resulta desconcertante. En el Hospital San Borja, el único médico japonés que trabaja en el sistema público de salud ha debido crear sus propios diccionarios y jugar a la mímica con los pacientes. Lejos de ser un problema, en el Hospital San Borja se divierten cada día con su doctor más exótico.

El cáncer le valió reconocimiento mundial, pero después, a un precio la detección vino en el momento más difícil de su vida. Tanaka, que habla japonés, se enfrenta a una situación que le resulta desconcertante. En el Hospital San Borja, el único médico japonés que trabaja en el sistema público de salud ha debido crear sus propios diccionarios y jugar a la mímica con los pacientes. Lejos de ser un problema, en el Hospital San Borja se divierten cada día con su doctor más exótico.

の大腸に癌が見つかるが、医師として対峙することができた。「従兄弟は33歳のときに癌になりましたが、46歳の今になっても、元気に生活していますよ。」

このような体験があるからこそ、PRENECへの参加を決めた。出身校である東京医科歯科大学から、チリ行きのオファーを受けても迷いはなかった。

ただ、当初は、様々なことで戸惑った。例えば、時間だ。「日本では、約束をすると、約束の時間前に待ち合わせ場所に来るが、チリでは、約束時間を過ぎてから、やってくるのです」。

チリに来る前に知っていたことは、気候やフルーツ、ワイン、サーモン、星だったという。「Almaプロジェクトは日本政府が支援しているプロジェクトなので知っていました。観測所の写真や天体写真をみたことがあります」。趣味は旅行だ。現在までに、バルパライソやビーニャ、イースター島、アタカマなどを訪れている。今後は、パタゴニアにも足を伸ばす予定だ。

日本の真裏まで一緒に来てくれた妻や子供たちとともに、田中医師は来年の5月に帰国する。それまでに、少しでもスペイン語を上達させたいという。

田中医師にとって、チリはとてもエキゾチックな国だそう。サン・ボルハ病院では、彼が最もエキゾチックな存在ではあるのだけれども。

(記事: Nadia Cabello, 翻訳: 四宮)

寄稿：TMDUと私

1968年に本学第一外科の村上忠重教授(当時)がチリを始めて訪問したことをきっかけに、東京医科歯科大学とチリの40年以上に渡る交流が始まりました。本号では、本学に留学され、現在カトリカ大学医学部消化器科准教授に就任されているアドルフォ・パラ医師にご寄稿いただきました。

アドルフォ・パラ医師 カトリカ大学医学部消化器科准教授

TMDUへの想いをこの限られたスペースでどのように語ることができるでしょうか。1995年から1999年の4年間、私は日本に滞在し、昭和大学藤が丘病院で内視鏡検査の研修を受けました。その頃、東京医科歯科大学の第一病理学教室にて研修中であったグアテマラ人の仲間より、世界的に有名な中村恭一教授(当時)の紹介を受けました。中村教授と教室のメンバーは、出会った当初から、手厚くサポートしてくれ、とても友好的でした。また、彼らはとてもオープンで国際的でした。実際に中村教授やメンバーとのコミュニケーションはスペイン語で行っていたほどです。

TMDUでの消化器腫瘍の内視鏡診断と治療に関する病理診断学の研修中には、沢山の外国人医師(多くはラテンアメリカ出身の医師)に出会うチャンスがありました。特に南米からTMDUに研修に来ていた内視鏡医と知り合うことができました。数多くの外国人医師がTMDUを訪問していることは大変興味深いことでした。

日本での私の経験が、私の人生を変えたといっても過言ではありません。後に妻となるTMDU歯学部で留学していた日系ブラジル人の女性と知り合うこともできました。数々の研修、様々な支援、友情を与えてくれたTMDUには、感謝の言葉しかありません。TMDUに留学できたことは私の誇りです。

日本での研修を終え、スペインに帰国した後は、内視鏡医として13年間勤務しました。現在は、チリ・カトリカ大学の消化器科に赴任して、1年を経たところですが、日本から帰国後もTMDUとの交流は続いています。スペイン時代には、江石教授(人体病理学分野)に研究のサポートをしていただきました。また、TMDUで知り合い、今でも良い友人の1人であるウルグアイの内視鏡医であるエドアルド・フェノッキ医師が自国で行った大腸癌早期診断プログラムにも協力することができました。フェノッキ医師とは、現在チリでの協力体制を模索中です。

チリ人のジョレンス医師によって設立された日智消化器病研究所、JICA主催の日本での内視鏡・病理分野の研修コースなど、TMDUが早期消化器腫瘍分野における最新知識の普及を長年に渡って行ってきた南米に、偶然にも現在私は住んでいるのです。

南米の数百万人の患者と数百人の医者だけではなく、世界中において、TMDUの国際医療社会への貢献の成果が広まることを確信しています。

(翻訳：四宮)

略歴：

アウトノマ・デ・マドリッド大学医学部を卒業後、1990年より、スペインで消化器医として勤務後、1995年より、昭和大学藤が丘病院で内視鏡医としての研修を受ける。その後、国立がん研究センター東病院でもフェローシップを行う。1999年にスペインに帰国後、内視鏡医として11年間にわたり勤務。現在は、チリ・カトリカ大学消化器科准教授。



江石教授、大山路長とチリで再会



来智していたフェノッキ医師(右)とLACRCスタッフと記念撮影

活動報告

TMDU訪問団によるチリ視察

2013年1月20日から26日まで、本学人体病理学分野の江石義信教授と関根正喜技官が訪智し、JICA・JSPSにおいて採択されている分子生物学分野の科学技術協力の一環として、病理組織標本作成の指導を行いました。また、JICAチリ支所、在チリ日本大使館等の訪問や、3月より新たにPRENECを開始するラ・セレナのカトリカ・ノルテ大学及びサンパブロ・コキンボ病院を訪問しました。その他、現在プロジェクトセメスターの課程で研究実習を行っている本学医学部4年生の研究発表会も企画され、江石教授、各担当教官、学生たちの間で活発な討論が行われました。



JICAチリ支所訪問



研究室を視察する関根技官



研究発表会の様子



ラ・セレナで現地メディアの取材をうけるCLCのロペス医師と江石教授

プロジェクトセメスター学生チリ滞在記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣しており、LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。今年度も、10月11日に6名の学生がチリに到着いたしました。このうち3名がCLC、3名がチリ大学の研究室に所属しています。本号でも、前号に引き続き、学生のチリ滞在記をお届けいたします。

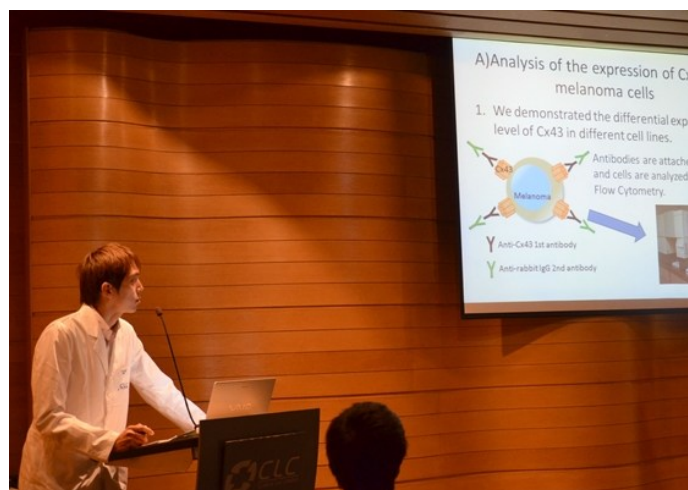
遠い異国の地で

猪田浩隆 チリ大学医学部腫瘍免疫学研究室所属

ここサンティアゴでの生活もかれこれ2ヶ月、仕事と生活のバランスもようやく取れてきました。私は海外に訪れた際、いつも訪れた国のバックグラウンドを調べるようにしています。そうすると、自分の何気なく見る風景がにわかに意味を帯びて浮かび上がってきます。

ここでは、旧市街と新市街があり、それぞれ大方、西と東に位置します。また、両者には格差があり、前者は治安が悪く貧乏で、後者は安全で裕福であります。欧州系の顔立ちが殆どで、彼らの多くは、欧州からの移民と先住民族の両方の末裔なのです。新市街では白人に近い人が多く、旧市街には原住民に近い人が多くいます。旧市街にはチリの伝統的な小さいレストランが並び、とても安い値段で食べられます。新市街では、豪華なマンション群がそびえ立ち、アメリカのような巨大モールでは日本の物価と殆ど同じです。私は以前その一つでレストランに入り、「NIKKEI」というメニューを頼んでみました。中身は照り焼きチキンでした。名前がTERIYAKIではないことから、この料理は直接ではなく日系移民によって広まったのでしょうか、祖国を懐かしんだ移民の気持ちに思いを馳せながらいただきました。そして、最近隣国アルゼンチンを訪れる機会がありました。首都ブエノスアイレスは、南米のパリと呼ばれるほどの欧州化された都市で、街の中心部では教会、官庁、銀行など多くの建物が欧米のそれに匹敵する見事なものでした。しかし、この街には影の面があります。この国は穀物の輸出により豊かな国になりましたが、21世紀前後の財政破綻と経済危機により、昔からの金持ちの多くは崩壊した祖国を背に欧州などへ逃げるようにして去って行きました。彼らの跡には大量の貧困層が残されていきました。犯罪の増加、ストライキやデモの頻発、中心部を走る地下鉄も荒廃し、影はいたるところに色濃く残っています。実は、この綺麗な町並み、20世紀の始めに国が豊かになり欧州から大量の富裕層が移り住み、パリを忠実に再現しようとした壮大な実験の遺産でした。骨董屋や古本屋では100年前の品が当時を思わせるように並んでいました。

南米の街は、様々な思惑で世界の各地から移り住んできた人たちの足あとが色濃く残っているところだと思います。彼らはそれぞれ何かに挑戦してこの地に立ち、一生懸命新しい国を建設しました



研究発表会でのプレゼンテーションの様子



高速道路が貫く家の近所の新市街の町並み。

が、その傍らで後にしてきた国をどうしても忘れることができなかったからなのでしょうか。私の曾祖父は、滋賀県の片田舎から高校卒業後、自分で会社を設立し、若干二十代で戦前の上海租界に家族で移住することを決断しました。中国大陆で事業を起こすためです。彼は日本語しか話せませんでしたが、狭い部屋の事務所から始めて、一つずつ実績を積み重ね、大きな会社に成長させたとのことです。彼がどのような苦勞をしてきたのか想像するのはやはり難しいことです。チリへ私が来たときは、彼のように一人で新天地に來たわけではなく、大学の事務所があり、そのスタッフの方々の助けを借りて生活し始めました。地理的に遠く英語すらまともに通じ

ないこの地で、拠点をひとつ開くにも、とてもとても大きなエネルギーが必要だったことと思われれます。そのようなことを考えていると、曾祖父の話や南米の街を見ているときと同じような気持ちが湧いてきました、しかしながら、それはさらにもっと目の前にあるような気がします。学生だと安全面から既知の航路だけを辿らせてくれるのが普通だと思うのですが、先頭の船が海図に載っていない海を進んでいて、その直後でぴたり付いている船に私達は乗っているみたいです。今現在、日々医療のために新天地で挑戦する方々の姿を脇で見られるということに、昔の人々がなしてきた様子をリアルタイムで見ているような感覚を覚えるのです。

チリにて —研究とスペイン語—

瀬賀雅康 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属

チリに来て早三ヶ月が経とうとしています。月日が過ぎるのはあっという間なもので残りの期間を大切に過ごしたいものです。さて、チリでの生活について紹介したいと思いますが、大きく分けて研究生活と日常生活に分けて紹介します。

研究についてですが、まず私の所属しているCLCの研究室では基本的に週に一回の小さなミーティングを設けて下さっており、その一週間の進捗状況の報告や論文の抄読会、発表の直前にはそのリハーサルなどに充てられています。チリ人の研究室員同士はスペイン語で会話しているのですが、私のスペイン語のレベルが日常会話程度未満なためにあいさつ程度を除けば、研究内容などについては英語で会話をしています。先月のNews Letterの後に二度目の進捗ミーティングがありそれに合わせて研究、及び発表の準備を行ってきました。現在は第三回目の発表会を目標に実験を着々と進めているところです。自分の実験内容をプレゼンテーションするのはその作り方を含めて大変勉強になります。

私の研究は大腸癌についてであるため、大腸癌のサンプルがどのようにして採集されているのかを知るために、実際に手術を見学させてもらえる機会があり、またサンボルハ病院の病理部へ河内先生と小林先生がいらっしゃるときに一緒にさせてもらったり、チリ大で行われた免疫学の講演会を聞きに行ったり、実験室以外の場を目にする機会にも恵まれました。現在は残りの期間が僅かとなってきたため、発表に間に合うようにサンプルの分析を行うことに専念しています。

さて、日常生活についてですが、私はこれまでスペイン語をしっかりと勉強をしたことがなかったので、来た当初はほとんど分からない状態でした。三か月経ってみると、よく使うような表現については、覚えて使うことができるようになり、話を聞いて詳細には解らないものの聞こえる情報の断片から内容を推測できる程度にはなりました。語彙数も少なく、流暢な会話はまだまだ難しいですが、話が通じたときの喜びは、来た頃に話が全くできずもどかしい思いをしてきたことを思い出すと大きな前進に思えます。



見事な彫刻が施されたおびただしい数の石の墓。プエノスアイレスにて(猪田)



チリ大学の研究室に向かう途中にある旧市街の風景(猪田)



CLCの研究室の皆さんとの記念撮影(瀬賀)

今回来た学生の中で私だけが滞在する上でホームステイという形態を取っているため、これについても少し言及します。ホームステイの一人暮らしとの最大の違いは、ホストファミリーとの会話が存在することにあると私は考えています。会話はスペイン語でなされるため、毎日のように交わされる挨拶や食事などについての基本的な言葉は来て比較的早期のうちに理解することができるようになりました。また、日本について質問をしてくれたときなど、なかなか説明が難しいことも多々ありスペイン語習得のためのやる気に対して良い刺激にもなりますし、日本についての理解を深めなければならないと改めて思われました。先日は日本食を振舞ったところ非常に好評で、文化交流という面でもより近いところで接することができると考えられます。なお、チリのスーパーマーケットは非常に食材が豊富であり、特に米が手に入るのは非常にありがたいです。

チリでの生活では日本とは違う物事が多くあるため普通の生活が非常に刺激的であり、少しずつ慣れては来ているもののこの新鮮な感覚を以てチリについて、また逆に日本について新たな発見ができれば良いだろうと考えています。残り少なくなってきた滞在期間ですが、研究についてもそれ以外でも何かしらの発見を試みながら過ごしたいと思います。



LACRCスタッフとの新年会の様子



手術室にてエンシナ研究員と



ホストファミリーに日本食を振る舞う

編集後記

LACRCオフィスは、CLCの大腸肛門科と併設しており3名の医師と4名の看護婦と秘書が所属しています。クリスマスには全員でプレゼント交換会をするなど常に笑いの耐えない明るいオフィスでLACRCスタッフも大腸肛門科の皆さんとの交流を楽しんでいます。今後もLACRCオフィスの近況をご報告してまいりますので、引き続き、ご愛読の程宜しくお願いいたします。(四宮里枝子)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 7, January 2013

[発行日] 2013年1月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: rshinomiya@clc.cl

Newsletter

No. 8 March 2013

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

旧交を温める

チリをはじめ中南米各国では、JICAの支援により日本で研修を受けた医師や、チリにて開催されていた日本人医師による講習会に参加した医師が多く、彼らは現在もそれぞれの母国で日本から学んだ知識、技術を活かし消化器疾患の診断、治療に活躍しています。

私が大学を卒業し本学第一病理学教室(現・人体病理学分野)の大学院生となった15年前は、毎年夏から秋にかけて中南米の医師に対する病理診断講習会が本学で開催されていました。コースリーダーの中村恭一教授(当時)のもと、全国から消化管疾患の診断・治療のエキスパートたちが講師として招かれており、世界最先端の知識・技術を学ぶことのできる講習会でした。若手医局員であった私は、講師の先生方のスライド係や、懇親会要員、また研修生のお世話などを仰せつかっておりました。自分とほぼ同世代の研修生が多く、講習会が終わった後や週末には、観光地を案内したり、和食レストランに連れて行ったり、私の母に頼んで自宅で手料理を振る舞ったりもしました。講習会は2006年に終了し過去のものとなりましたが、何の因果か南米に赴任することになった現在、当時の研修生と再会する機会に恵まれるようになりました。先日訪れたエクアドル・キトでは、15年ぶりの再会が実現しました(写真)。また私が医師になる前に日本で研修を受けた医師達にも出会いました。彼らは日本で学んだ知識、技術がいかに素晴らしかったかを語り、日本で出会った友人達のことを懐かしそうに話してくれました。日本で学んだことを母国で真摯に実践し、また後進に広めている現在の彼らを見て、かつての講習会は今も生き続けているのだと感激しました。国際協力の理想的な姿を見たように思います。

ニュースレター第8号では、進行中の大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の報告を中心に、LACRCの活動をお伝えしてまいります。また前号に引き続き医学科4年次プロジェクトセメスター学生によるチリ滞在記もお届けいたします。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENEC最新情報	2
TMDUと私	4
活動報告	5
プロジェクトセメスター	6

PRENEC最新情報

本年5月に開始されたラテンアメリカ共同研究拠点(Latin America Collaborative Research Center,以下LACRC)のメインミッションであるPRENECの最新情報をお伝えいたします。PRENECでは、第5州のバルパライソ、第12州のプンタ・アレナスにおいて、それぞれ年間3,000人、サンティアゴにて5年間で2万人を対象に免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を実施することになっており、3月末時点では全拠点で、約5,400が登録、約2,500名がiFOBTを終了しています。PRENECは、中南米諸国にも広がっており、現在エクアドル、パラグアイにてプロジェクト実施における取り組みが始まっています。本号ではエクアドルでのプロジェクトをご紹介します。

エクアドルにおけるPRENEC

エクアドルにおいて、大腸癌による死亡率が上昇傾向にあることを背景に、エクアドル政府の要請を受け、本学は2012年8月に、「エクアドル国保健省・東京医科歯科大学間の大腸癌スクリーニングの実施のための覚書」を締結いたしました。現在、首都キトにあるパブロ・アルトゥーロ・スアレス国立病院(以下、スアレス国立病院)において、大腸癌早期検診のパイロットプロジェクトがスタートしています。スアレス国立病院病院は、エクアドル保健省直轄病院の一つで、プロジェクトはエクアドル保健省の支援の下進められており、本学はこのプロジェクトをサポートしています。このプロジェクトは、同病院の病理医であるモンタルボ医師を中心に行われ、CEOであるグアマンティカ医師によって全面的に支援されています。

パイロットプロジェクトは、免疫学的便潜血反応検査にて行い、チリと同様、栄研化学のOCセンサーおよび便潜血キットを用いています。検査方法や陽性陰性のcut off値も、チリにおけるプロジェクトと統一されており、チリのプロジェクトリーダーであるロペス医師のアドバイスを受けながら、進められています。

同病院の内視鏡施設においては、FUJIFILM製の南米における最新機種が2ブース分用意されているほか、十分な広さの検査室とリカバリー室を持った内視鏡室が設置されています。また病理診断については、日本の診断基準を導入したいという強い希望のもと、LACRC が提供した病理診断フォーマット(日本の診断方式に基づいたもの)を用いてデータベース登録しており、病理標本作成プロセスには、過去にJICAから援助された機材が有効に活用されているとともに、本プロジェクトに関する予算によって新たな機材も導入され、その環境は十分整備されています。

検診者に対しては、検査室前の待合スペースに設置されたテレビモニターにて、大腸癌や検査方法を含めたプロジェクトの解説ビデオを流すことで検診者への十分な説明・教育をおこなっています。

現地の内視鏡医・病理医・技師は、本プロジェクトに対しては大変前向きであり、またエクアドル保健省の支援体制も充実している様子が伺われます。



FUJIFILM製の内視鏡機器が設置されている内視鏡室の様子



プロジェクト用に新規購入された病理機材

第一回エクアドル日本・大腸病変講習会が開催

エクアドルにおける大腸癌検診プロジェクトリーダーであるモンタルボ医師からの要請で、内視鏡技術および病理診断技術の指導を目的として、スアレス国立病院にて、第一回エクアドル日本・大腸病変講習会(Primer curso ecuatoriano-japonés de lesiones colorectales)が本年2月4日から7日までの4日間に渡り開催され、LACRCより河内講師(病理分野)、田中助教(内視鏡分野)が講師として参加しました。

内視鏡分野においては、大腸内視鏡前処置の意義と方法、大腸内視鏡挿入テクニック、微小大腸病変の拾い上げ方法、内視鏡診断方法について講義を行ったほか、田中助教によるパイロットプロジェクトの患者に対する内視鏡検査を行うデモンストレーションを実施しました。

また病理診断分野においては、日本の大腸癌取り扱い規約の紹介、日本の診断基準の解説、早期大腸癌の治療方針にする最新の知見、大腸病変の診断に必要な免疫組織化学・分子生物学的知識の解説が行われました。



講習会の参加者と記念撮影



病理診断部門の講習会の様子



修了証を手にする講習会の参加者



在エクアドル日本大使館を訪問

寄稿：TMDUと私

本学は、JICA支援下の日本における研修会(早期食道・胃・大腸癌の病理組織診断)を通じて、中南米地域の医師の人材養成に協力して参りました。本号では、この研修に参加し、現在エクアドルのスアレス国立病院で大腸癌早期検診スクリーニングのパイロットプロジェクトを実施しているアレクサンドラ・モンタルボ医師にご寄稿いただきました。

アレクサンドラ・モンタルボ医師(エクアドル)

パブロ・アルトゥーロ・スアレス病院 臨床検査室長

2003年、私はTMDUにて開かれた「早期胃癌と関連腫瘍コース」に参加する機会がありました。このコースは、小池盛雄先生のコーディネートにより、中南米の参加者のために開催されたもので、私がリスペクトする日本のライフスタイルや文化・社会まで学ぶことができました。

コースでは、早期癌の診断と処置において重要な鍵となる癌や前癌性ポリープ、その他消化管の異常を検出するための診断技術についての講習を受け、早期病変の発見が早期治療に繋がることを学びました。

エクアドルには、1,466万人の人々が住んでおり、統計によると、大腸癌の発生率は、男性では10万人あたり10.2、女性では9.8という結果が出ています。男性は4番目、女性では5番目に多い悪性腫瘍です。首都キト、北部のロハのような都市では、その発生率が他の地域と比べて2倍の結果となっています。

この状況を鑑み、2004年にTMDUの江石教授は私が勤務する公立病院における大腸癌早期検診スクリーニングのパイロットプロジェクト実施を提案されました。これは便潜血検査と大腸内視鏡検査、及び病理組織学的検査を組み合わせた免疫化学的方法を用いるもので、1,000人を対象に実施し、1名に早期癌が見つかりました。この癌患者には、手術を実施し、5年以上生存しています。

2010年には、TMDUの招待により、CLCにて行われたLACRC開所式に参加しました。また、チリ・ウルグアイ・エクアドルの医師を対象とした「日智消化器癌検診コース」にも参加する機会があり、各国の大腸癌検診スクリーニングの情報共有をすることができました。

2011年8月は、TMDUより8名の医師がキトを訪れ、ハラ副保健大臣や今井駐在エクアドル大使、高井JICAエクアドル支所長と面会しました。この訪問のおかげで、エクアドルの癌予防対策において、大腸癌早期検診スクリーニングの実現は重要なポイントであることを関係者全員が再認識することになりました。

その後2012年には、保健省の科学技術部門より、スアレス国立病院における大腸癌早期検診スクリーニングの実装が採択され、機材・薬品購入、インフラ整備、人材確保のために410,000USドルの資金を獲得し、後日、64,870USドルの追加資金を得ることができました。更に2012年は、TMDUの医師が講師として参加されたエクアドル初の「胃腸腫瘍に関するシンポジウム」が保健省主催で開催されたほか、大腸癌早期検診スクリーニングを実施するため、TMDUと保健省の間で、国家レベルの協定を締結するに至りました。

2013年2月には、保健省主催、TMDU後援にて「第一回エクアドル日本・大腸癌講習会」が開催されました。TMDUの河内医師と田中医師を講師としてお迎えし、スクリーニングに必要な診断や検査



TMDU訪問団と記念撮影(右から2番目:モンタルボ医師)

略歴:

1995年にセントラル・デル・エクアドル大学医学部を卒業後、病理医としての研修を積む。ジャルキ病院の臨床検査室長を経て、2002年、パブロ・アルトゥーロ・スアレス国立病院の臨床検査室長に就任し、2004年よりトウンバコ・クリニックの病理・臨床検査長の兼任。

に関するテクニックを学び、参加者からは同様の講習会をもっと開催してほしいとの声が多数上がりました。

パイロットプロジェクトは、現時点で3,720名のスクリーニングが終了、9名の癌患者が見つかり、そのうち7名が早期癌でした。大腸癌検診スクリーニングは、延命が難しい進行性癌の治療費用よりも低い費用で行うことが可能です。(進行性の大腸癌における治療費用が平均で39,880USドルであるのに対し、早期の大腸癌における治療費用は平均で1,383USドルです。また、早期の大腸癌における5年以上の生存率が90%であるのに対し、進行性の場合、8~15%となっています)。本プロジェクトで最も重要なことは、治療可能な状態での大腸病変を発見することで沢山の命を救うということです。

最後になりましたが、エクアドルの医療関係者一同を代表して、TMDUの先生方に御礼を述べたいと思います。特に江石教授はエクアドルで大腸癌の罹患率と死亡率を減少させるために、プロジェクトの立ち上げにご協力いただきました。また、多大なる支援を行ってくださる日本大使館とJICAエクアドル支所、当初より本プロジェクトを支援し、国中で検診を行えるよう力添えをして下さっているエクアドル保健省関係者の方々にも深く感謝をしています。

JICAとTMDUとの協力体制は、長期的な視点で、社会支援を実現しており、その活動は成功を収めていると実感しています。

(翻訳:四宮)

活動報告

サンチャゴ日本人学校中学部による職場訪問

サンチャゴ日本人学校からの要請により、本年2月15日に、中学部による職場体験の受け入れを行いました。当日は、中学部の生徒3名が、CLCを訪問し、LACRCオフィスにて河内講師による病理部門の説明を受け、標本の観察を行ったほか、腫瘍学・分子遺伝学研究室にて小林助教の実験の様子を見学しました。また、田中助教が勤務するサン・ポールハ病院日智消化器病研究所も訪れ、内視鏡室にて内視鏡検査の見学を行いました。参加した生徒達からは、「患者さん1人1人に丁寧に診察をしていること、1つ1つの細胞を細かく見ていることなど、とても集中力が必要な仕事だという発見があった」、「ドラマで見るような現場を見せていただけて本当に嬉しかった。貴重な経験ができた。」等のコメントがあり、大変好評でした。若い世代に医療の道に興味を持ってもらえるよう今後も積極的に見学体験学習に貢献してまいります。



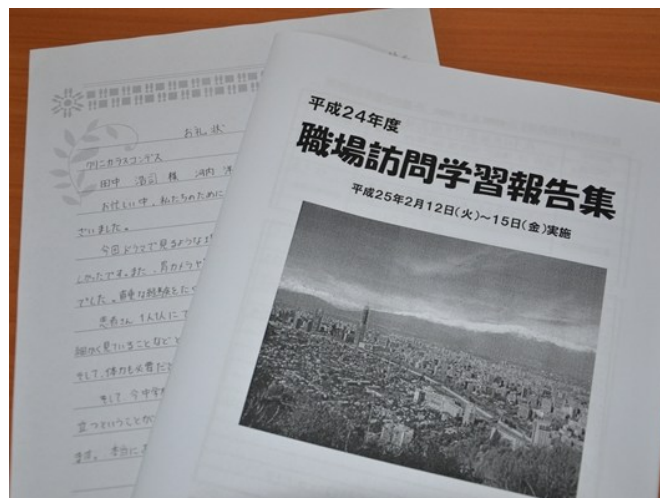
田中助教のもと、内視鏡を手にする生徒



小林助教の実験を見学



河内講師の指導のもと、標本を観察



学生からの礼状と日本人学校発行の報告集

プロジェクトセメスター学生チリ滞在記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣しており、LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。今年度も、6名の学生が10月11日～2月17日までチリに滞在しました。前号に引き続き、学生のチリ滞在記をお届けいたします。

4ヶ月半の研究生活 そこで築けたもの

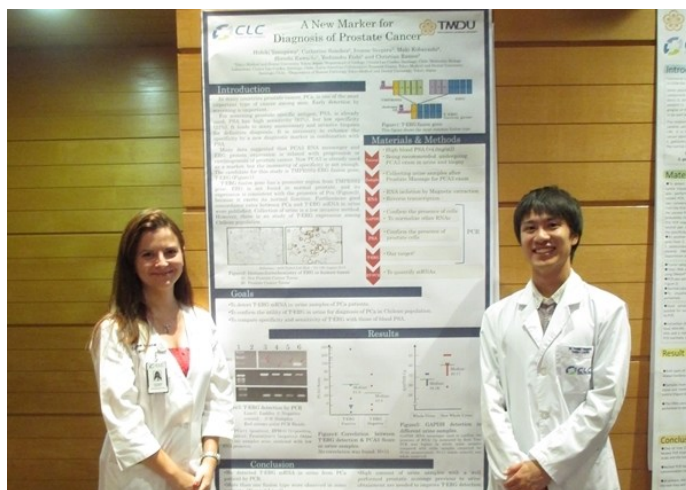
柳川英輝 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属(前立腺癌)

私は医学科4年のプロジェクトセメスターという研究室に約5ヶ月間所属させていただく期間に、チリのCLCにある泌尿器科の研究室にお世話になりました。研究テーマは前立腺がんのスクリーニングに用いる新たな腫瘍マーカーの評価です。尿採取による検査ですので侵襲が小さく、現在臨床の現場で用いられている腫瘍マーカーと組み合わせることでより良いスクリーニングが行えるのではないかと期待されています。私が行ったのは、サンプル内の標的RNAの有無、濃度を計測し、臨床現場の診断と比較検討するというものでした。病院内の検査室の機器も使わせていただけるなど、設備も十分に用意して頂き、順調に研究を進めていくことが出来ました。

研究室での生活のお話をさせて頂くと、研究室には泌尿器科の他、消化器外科の方もおり、スペースを共有していました。ですので、大変賑やかな雰囲気です。生活を送れたのですが、研究室で働く方々の中で泌尿器科に属するのは私の指導担当、Ms. Sanchezただ一人でしたので、この方との二人三脚で研究を進めていくこととなりました。大変丁寧な指導をして頂き、充実した研究を体験できた一方、日常のコミュニケーションには少し苦勞もありました。というのも、Ms. Sanchezと仲の良い技士の方たちはスペイン語しか話せず、話の輪に入ることが出来ず苦しい思いをすることも少なくありませんでした。また、プログラムの最後に打ち明けられた話では、Ms. Sanchezも男子大学生と何を話せばいいのかと初めは困っていたようです。この様な関係から徐々に良い関係を築いていけたことも良い経験となりました。

研究室の外の日常生活は先進国に引けをとらない水準でした。大きなショッピングモール、スーパー、充実した交通網、整備の行き届いた上下水道、町をきれいに保つ清掃員。南米の地で、蛇口の水を生で飲めるとは想像もしていませんでした。それでも唯一の苦勞はやはり言葉です。街中では英語はほとんど通じず、片言のスペイン語を使いながらの生活でした。それでも東洋人の珍しさからか、デパート中を案内してくれた店員さんや、自分の名前の漢字の当て字を教えて欲しいと言ってくる店員さんなど、温かな交流もあり、素敵な生活になりました。そして、スペイン語が上達するにつれ、店員さんの反応も、文化に馴染んだ東洋人を歓迎してくれるようになり、大きな達成感を味わえました。

もう一つ、チリでの夏休みに頂いた時間で経験した南米について



指導担当のMs. Sanchezと研究発表会にて



旅行で訪れたマチュピチュでの一枚

書かせていただきます。チリは南北に長い国土を持ち、北には砂漠が、南には氷河が、そして南極大陸にも隣接しています。それほど広い国土でありながら、どこへ行っても人は温厚でまじめな人ばかり。しかし、ひとたび国境を越えてペルーやボリビアに入ると、その違いに驚かされます。チリが南米の地で強い経済力を発揮している土台に触れられた気がします。

最後に、このような素晴らしい研究生活を遠いチリの地で送ることが出来たことは多くの方々の支えがあったからこそです。LACRCの河内先生、田中先生、小林先生、四宮さん。そして日本よりこのプログラムを支援して下さっている江石教授、人体病理の方々、菅原さんをはじめとする大学の方々。多くのお力をお借りでき、無事プログラムを終了できたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。

地球の裏側へ 感謝を込めて

大木紗弥香 チリ大学医学部神経科学研究所所属

チリから帰国して1カ月が経とうとしていますが、ニュースなどで「チリ」という言葉を聞いたり、スペイン語を耳にしたりするたびにチリでのことが懐かしく思い出されます。あまりにチリでの生活が当たり前すぎて、またあと1カ月ほどしたらサンチアゴに戻るのではないかと錯覚してしまいます。

私はチリ大学医学部の分子細胞神経生物学教室にて、大脳皮質における神経発生過程に対する転写因子の関与についての研究を行いました。研究内容はかなりspecificで複雑なもので、理解するのは容易ではありませんでしたが、元来自分の興味のある分野ということもあり、研究を進めていくことが楽しかったです。また月に一度CLCで開かれる月例報告会では、英語で研究の進捗状況を発表し、質疑応答をこなす必要がありました。最初はとても緊張しましたが、共通言語としての英語の重要性を実感すると同時に、将来にむけてよい機会を与えていただいたと思っています。

ただ、研究の途中で購入した抗体が失活していたり、日本とは違うチリの時間感覚に苦労したりで、このままでは何も研究成果を日本に持ち帰れないのではないかと真剣に悩んだ時期もありました。

その際にはLACRCの河内先生、小林先生には相談に乗っていただいたり、レポートを校正していただいたりとお世話になりました。海外で研究生活を送る難しさを身をもって体験することになりましたが、それもこれからの糧になったと思っています。

一方で、研究室生活はとても楽しいものでした。研究室の方々と昼休みにアイスを一緒に買って食べながら『となりのトトロ』の話で盛り上がったり、チリ料理のレストランに連れて行ってもらったりと、色々と気を配っていただきました。何よりも、半年間限りの私を研究室の一人の仲間として扱ってくださったことがとてもうれしかったです。そして、研究室での最終日にはサプライズでケーキを買ってきて下さり、研究生活の終了をお祝いして下さいました。ただ、私はお祝いという気分には全くなれず、もうこの研究室に来るのも最後と思うと寂しさで一杯でした。その後一人一人お別れを言いに来て下さった時には、涙が止まりませんでした。「世界は小さいから、会おうと思えばきっと会える」と口々に励まして下さったことが忘れられません。

この半年間、私達はチリの方々に大変親切にいただきました。最初は言葉も分からず初めての土地でとても心細かったのですが、半年間を充実したものに出れたのは皆さんのサポートがあったからに違いなく、感謝してもきれません。その方々に私が何を返せるかを考えた時、自分にいただいた分をその方々に全て返すことは難しいでしょう。私にできることは、今度は自分が、日本に來ている留学生やチリの人はもちろん、周りの人に親切にすることなのだと思います。



研究室でのお別れパーティにて



日本語を勉強しているサンチアゴ大学の学生と

編集後記

私事で大変恐縮ではございますが、この度新しい命を授かり、4月より産休・育休に入るため、休職させていただくことになりました。後任は、Jaime Urrejola(ハイメ・ウレホラ)が担当させていただきますので、何卒よろしくお願い申し上げます。今後ともLACRCオフィスの近況をご報告してまいりますので、引き続き、ご愛読の程宜しく願いいたします。

(四宮里枝子)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 8, March 2013

[発行日] 2013年3月29日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: rshinomiya@clc.cl

Newsletter

No. 9 May 2013

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

El Cobre (銅)

チリといえばワイン、アンデス山脈、鯡、など思いつくものはいろいろとありますが、チリ経済を支えているといっても過言ではないのが、銅です。電線や電気製品の回路などに多く使われることから世界的な需要も高く、また投機資金の投入も相まって銅価格の高騰が続いています。チリは国別銅生産量が世界全体の約3割を占める最大の輸出国であり、銅輸出により大幅な財政黒字がもたらされています。

チリの銅採掘には国営企業であるCODELCOだけでなく、国内外の資本が参入しており、現在でも多くの鉱山が開発中です。日系企業の参入も多く、鉱山関連の駐在員の方々も増加しつつあり、チリの日本人コミュニティも徐々に大きくなってきている印象です。駐在員の方々から、鉱山開発に目処が付き、いよいよ採掘段階に移るのだ等という話を聞くと、種を蒔かれたプロジェクトが実を結びつつあるのだなと嬉しく思います。同時に、我々のプロジェクトもチリ・中南米において医療分野でいずれ実を結ぶことを願わずにはいられないのですが果たして！？

ニュースレター第9号では、進行中の大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の報告を中心に、LACRCの活動をお伝えしてまいります。また、内視鏡分野スタッフの交代がありましたので本号にて報告させていただきます。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



チリの銅で作られた製品(チリのロデオ)



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENECの進捗	2
TMDUと私	4
活動報告	5
Staff	7

PRENECの進捗状況

LACRCのメインミッションであるPRENECの最新情報をお伝えいたします。このプロジェクトは、第5州のバルパライソ、第12州のプンタ・アレナスにおいて、それぞれ年間3,000人、サンティアゴにて10,000人を対象とした免疫学的便潜血反応検査（以下、iFOBT）を計画しています。PRENECは、中南米諸国にも広がっており、現在エクアドル、パラグアイにてプロジェクト実施における取り組みが始まっています。

第1回PRENECインターナショナルコースを開催

第1回PRENECインターナショナルコース（Primer curso internacional PRENEC）が本年3月18日に開催され、LACRCより河内講師（病理分野）、田中助教（内視鏡分野）が講師として参加しました。

本コースは、FUJIFILMの支援の下、クリニカ・ラス・コンデス（以下、CLC）大腸肛門科によって行われたもので、将来のPRENECへの加入促進を目的とし、ブラジルから4名、チリ国内（第2州のアントファガスタ、第9州のテムコ、第10州のオソルノ）より3名の消化器科・大腸肛門科の医師が出席しました。

参加者は、現在プンタ・アレナスにて実施されているPRENECの事例を参考にしながら、PRENECの運営方法や、プロトコール、様々な分野ごとの講習を受講し、講習後には「当院でもPRENECに加入できるよう前向きに検討していきたい」等の力強いコメントが寄せられました。

今後も、LACRCスタッフは、CLCの大腸肛門科と連携しながら、PRENECを中南米諸国に普及するために活動を行っていく予定です。



コース参加者とCLC・TMDUスタッフとの記念撮影



コース参加者との懇親会の様



コースの様子

サンティアゴにおけるPRENEC

本年5月より、サンティアゴにおけるPRENECが満を持してスタートいたしました。

サンティアゴにおけるPRENECは、プンタアレナスにおいてPRENECに携わった経験を持つパレデス看護師がコーディネーターとしてサン・ボルハ・アリアラン病院の日智消化器病研究所に3月に着任し、準備が進められてきました。参加条件を満たす市民の抽出は、CESFAM(地域の保健所)に登録されている情報から行われています。その情報に基づき3月下旬よりPRENECコールセンターの秘書が電話によるPRENEC参加案内を開始いたしました。

同時に、PRENECプロジェクトのプロモーション活動も4月上旬より、サンティアゴの各診療所、地域の会合、健康フェア等にスタッフが赴き行われています。またCESFAMにおいてもPRENECプログラムに参加することにより得られる利益について医療補助スタッフに

よる情報提供が行われています。

現在では、それぞれのCESFAMIには医療補助スタッフが各1名配置されており、前記の活動のみならず、PRENECプロジェクトに関する市民からの問い合わせや条件を満たした新規参加者の登録を促す役割も果たしています。

現在、管轄倫理委員会の承認を待っている段階ですが、6月中旬には登録者へのiFOBTキット配布がスタートする予定です。登録者に対しては、キット使用方法に関するレクチャーを行った後iFOBT検査を実施し、陽性者には7月より大腸内視鏡検査を開始する予定です。

2013年5月現在、サン・ボルハ・アリアラン病院の日智消化器病研究所に設置されたPRENECセンターは、秘書2名、看護師2名、医療補助員5名からなる計9名のスタッフで構成されております。



サンティアゴのPRENEC拠点のスタッフ



改修が終わり、内視鏡検査を待つ日智消化器病研究所



CESFAMでプロモーションを行うスタッフ



CNNチリの取材を受けるサラテ医師

寄稿：TMDUと私

本学は、JICA支援の下、日本にて行われた研修会（胃がん早期発見治療プログラム）を通じて、中南米地域の医師の人材養成に協力して参りました。本号では、本年1月から3月まで日本で開催された集団研修「中南米・アジア地域上級早期胃癌診断－早期消化器癌の診断と治療－」に参加し、本学の河野教授（食道・一般外科学分野）の指導の下研修を行ったCLCのアレハンドロ・サラテ医師にご寄稿いただきました。

アレハンドロ・サラテ 医師

クリニカ・ラス・コンデス 大腸肛門科所属

本年、JICA支援のおかげで、私は東京において真に忘れがたい2ヵ月間を過ごすことが出来ました。私にとって、東京で実施された集団研修「中南米・アジア地域上級早期胃癌診断－早期消化器癌の診断と治療－」への参加が許されたことにより、最新の医療知識、技術等ばかりでなく、現実の日本文化や社会にも触れることのできる機会を得ることができました。

1月下旬から3月中旬のほぼ8週間、私は非常に興味深く有用な講義からなる全体研修に参加し、その後東京医科歯科大学にて個別研修を行いました。本学では、河野先生の指導のもと病院研修の一環として、多くの内視鏡や外科手術を見学し、また病理部では検体処理を見学する機会を得ました。

日本で過ごした期間は約2ヵ月間という短いものでしたが、日本の医療に関して多くのことに気づかされました。例えば、東京医科歯科大学の充実した医療設備で提供される先進性に富む高度な技術のみならず、同附属病院に勤務している医療スタッフの勤勉さとプロ精神にも感心せずにはいられませんでした。

一方、この日本滞在期間で、日本人のユニークな働き方と規律正しさは東京医科歯科大学医学部附属病院に限らず、日常生活に関わる各種の活動にも反映されるということを理解しました。確かに、これは誰が見ても良き生活のあり方だと思えます。

最後に、この場を借りて、TMDUとJICAスタッフの貴重なご支援、ご協力に感謝を申し上げます。特に河野先生を始め、江石先生、岡田先生には大変お世話になりました。

この研修が私の医師としての修練に大きく貢献したことは偏に皆様のおかげです。

（翻訳：ウレホラ・ハイメ）



略歴：

チリ・カトリカ大学医学部を卒業。2008年より、本学で大腸・消化外科を専門とする医師のコーディネーターに就任し、同時に同学でもリサーチフェローとして勤務。その後、クリニカ・ラス・コンデスの大腸肛門科・分子遺伝学でリサーチフェローとなる。現在は大腸肛門科のみならず救急治療部主任としても勤務。



TMDUの仲間による研修終了慰労会



JICA研修におけるプレゼンテーション

活動報告

日智商工会議所にて講演

日智商工会議所(Camara Chileno Japonesa de Comercio e Industria A.G.)は、チリで活動する邦人企業が経営及び公的活動の発展を促進することを目的に結集され、さらには恒常的な連絡場所としての役割を果たす為に1980年に設立された非営利団体です。現在では日系62社、チリ7社の企業会員を擁し、また在チリ日本大使館、サンチャゴ日本人学校、JICA、JETRO等の政府系機関や国立天文台といった学術機関も参加しています(<http://www.camarachilejapon.cl/>)。

同所では、会員向けに様々な分野の専門家を招き、定期的に講演会を開催しています。この度、4月16日にLACRCの河内講師が「チリおよびラテンアメリカにおける医療技術支援」と題し、講演を行いました。講演では、過去のJICAによる医療技術支援の歴史や、現在のプロジェクトの概要などを紹介しました。当日は多くの日系企業・チリ企業の会員が参加され、東京医科歯科大学とチリ・ラテンアメリカ諸国との結び付きや我々の活動についてご理解頂きました。在チリ日系社会の方々に我々の活動を知って頂く良い機会になりました。

本学における中南米での取り組みを多くの方に知っていただく

ため、LACRCでは今後も積極的にこのような活動に参加してまいります。



講演会終了後、嶋崎利浩会頭(智利三菱商事)による記念品贈呈

三井チリ・森泰憲氏へ記念品贈呈

三井チリ(三井物産株式会社・在チリ法人)前社長・森泰憲氏は、LACRCが開設された2010年4月当時、日智商工会議所の副会頭を務められていました。東京医科歯科大学として初めての常駐スタッフ派遣に際し、当時チリでの生活における情報が一切得られない状況の中で、赴任者の生活のセットアップの為に大変親切に対応して下さっただけでなく、我々の活動に関しても、御理解・御支援を頂き、式典や公式晩餐会等にも日智商工会議所を代表して御出席いただきました。不安の中スタートしたLACRCが、順調に船出することができたのは、森氏の御尽力があつてのことです。本年4月末日をもって、森氏が任期を終えられ帰国されることになり、これまでのご支援に対する感謝の意を込めてLACRCスタッフがサンチャゴ・三井チリを訪問し、記念品を贈呈いたしました。森氏の日本での益々のご活躍を祈念致します。



三井チリ・オフィス前で森前社長と

秋葉厚労副大臣のCLC訪問

4月26日から5月5日にかけて、厚生労働副大臣・秋葉賢也氏ら訪問団がブラジル、チリ、フランスを訪問されました。チリでは村上在チリ日本大使らとともに、マニャリッチ保健大臣と会談され、医療分野における協力強化について意見交換がなされました。その後、CLCを訪問され、LACRCの視察、CLCのグレベCEOやテヒアス病院長と懇談しました。秋葉副大臣は本学の取り組みを高く評価されるとともに、これらの活動を通じて、日本の医療技術や機器・検査試薬が中南米で広まっていくことへの期待を表明されました。



LACRCスタッフによる秋葉副大臣らへのブリーフィング



CLCのグレベCEO、テヒアス病院長、ロペス医師らと記念撮影

エクアドル訪問

4月27日から5月1日にかけて、LACRCスタッフ3名（河内、田中、岡田）がエクアドル・キトを訪問しました。この訪問はエクアドル保健省と東京医科歯科大学間の協定に基づいて行われたもので、現在進行中の大腸癌早期診断プロジェクトの視察、内視鏡診断・治療に関する助言、病理診断に関する意見交換などを行いました。同プロジェクトは、プロジェクトリーダーを務めるモンタルボ医師が所属するパブロ・アルトゥロ・スアレス国立病院で進められてきました。同病院でのパイロットプロジェクトの成功を受けて、今後他の国立病院・私立病院にもネットワークを広げる構想が進められていることから、候補施設であるエスピノー・エスペホ国立病院への視察も行いました。また在エクアドル日本大使館、JICAエクアドル支所を訪問し、活動報告を行いました。今後も定期的にエクアドルを訪問し、プロジェクトの支援を行って参ります。



岡田助教による内視鏡検査の様子

Staff

2011年12月より約1年半にわたり、CLCや保健省直轄のサン・ボルハ病院で、内視鏡の臨床指導に取り組んでいた田中浩司助教が、任期満了のため、5月に離任いたしました。

また、田中助教の後任として、2013年4月に、岡田卓也助教がLACRCに着任いたしました。

離任挨拶

田中浩司 LACRC 食道・一般外科学分野

私は、2011年12月29日にサンティアゴに到着してから、この5月に帰国するまで16ヶ月半チリ拠点LACRCの職員として働いてきました。

前任の西蔭医師の後任として、チリでの大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)に内視鏡医として参加し、実際に現地で内視鏡検査・内視鏡治療を行ったほか、サンティアゴの国立サンボルハ病院では、若い消化器内科医、大腸肛門外科医に内視鏡指導を行いました。また、チリと同じようにプロジェクトを開始したエクアドルのキトにも2度出張し、当地の医師と一緒に大腸内視鏡検査を行うことができました。

計4病院で内視鏡検査を行ってきましたが、設備の差はあれ、携わる医師・病院スタッフはみな日本人の私に親切であり、楽しく仕事をすることができました。

PRENECは、地方都市であるプンタ・アレナス、バルパライソで現在行われています。しかし、このプロジェクトのメインとなる首都サンティアゴでは、ようやく5月から開始となり、残念ながら私はその場に立ち会うことができません。このことが唯一の心残りではありますが、その責務を後任の岡田医師に託し、日本よりサンティアゴでのプロジェクトの成功を見守りたいと思います。また、今後チリ国内外の複数の地域でプロジェクトが展開される予定であり、LACRCの活動が南米中に大きく発展していくことを心より祈念し、離任の挨拶とさせていただきます。

Viva Chile, Viva LACRC!!



サンボルハ病院の内視鏡室スタッフと



キトのプロジェクトスタッフと

着任挨拶

岡田卓也 LACRC 食道・一般外科学分野

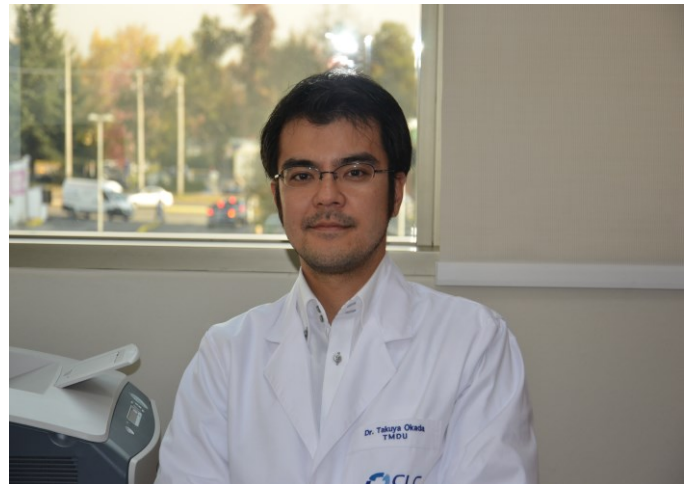
本年4月より東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点に着任致しました、岡田卓也と申します。関係者の皆様のご協力のもと、無事にチリ共和国、サンティアゴに到着し、居住手続き等も済んで生活環境は万事順調に整っております。

サンティアゴでの暮らしは約1ヶ月となりました。街の印象は綺麗な山々に囲まれた大都会で、自然や歴史的な建造物を残しながら近代的なビルやショッピングモールが立ち並び、現在も次々と新しく建設されています。チリ人特有の人々の温かさ、経済発展のスピードを同時に肌で感じることができる魅力的な街です。

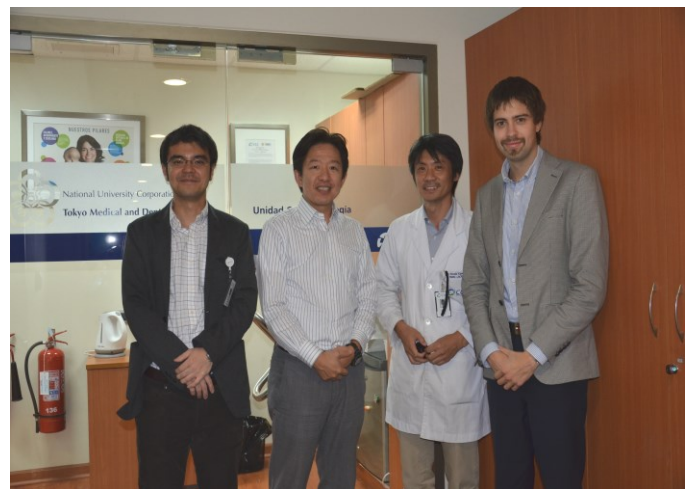
私が配属された内視鏡部門では実際に内視鏡検査を行いながらプロジェクトに参加し、現場医師と診断や治療に関する意見交換を行っています。内視鏡検査を正確かつ安全に行うには、周りのスタッフとの連携のみならず、患者さんへの声掛けも重要です。まずはスペイン語でのコミュニケーションを円滑に進めることを喫緊の目標とし、日々業務に取り組んでおります。

慣れない土地で単身での生活が始まりましたが、オフィスのスタッフは勿論のこと、現地日本人の方々、JICAプログラム等により来日した際に知り合ったチリ人の友人達にも助けられ、充実した日々を送っております。特に、現地関係者の皆様の、プロジェクトを含め医療に対する熱心な姿勢は私としても学ぶべき所が多く、良い経験をさせて頂いていると実感しております。

今後もニュースレターを通じて活動の様子を逐次ご報告させていただきます。今後ともご声援のほど宜しくお願い致します。



岡田助教(LACRCオフィスにて)



LACRCスタッフ(写真左より岡田助教、田中助教、河内講師、ハイメ)

編集後記

私は先月より、産休に入った四宮の後任としてClínica Las CondesのLACRCオフィスに勤務しているウレホラ・ハイメと申します。国立サンティアゴ大学の日本語・英語翻訳課程を卒業し、幸い文部科学省の奨学生に選ばれ上智大学に留学することができました。今後もより良いニュースレターを作成するため、皆様の温かいご支援をよろしくお願いいたします。

(ウレホラ・ハイメ)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 9, May 2013

[発行日] 2013年5月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: jurrejola@clc.cl

Newsletter

No. 10 July 2013

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

El agua dura de Chile (チリの硬水)

水に含まれるカルシウムとマグネシウムの量は、地域・地勢によりさまざまです。WHOでは、硬度(カルシウム量 $\text{mg/L} \times 2.5$ + マグネシウム量 $\text{mg/L} \times 4.1$)が 120mg/L 未満が軟水、 120mg/L 以上が硬水と定義されています。日本の水道水は概ね軟水に分類されます(東京都水道局の資料では文京区における水の硬度は平均 78.5mg/L)。他方チリ・サンティアゴでは、アンデスの雪解け水が主水源で、豊富なミネラルを含んでおり、硬水となっています(チリ大学の調査によると平均 393mg/L)。硬水に多く含まれているマグネシウムの影響で、普段硬水を飲むことが少ない日本人はお腹が緩くなりやすいと言われています。我が家もチリでは水道水の飲用は避け、比較的硬度の低いミネラルウォーターを購入して飲用としています(硬度だけでなく衛生的な理由もありますが)。ちなみにチリ南部(第VII州より南)では日本と同様軟水が多いとのこと。 「チリの水は硬い」というイメージが強いですが、それはチリ中部から北部に限ってのことのようで、南北に長いチリならではの地域差といえましょう。

さて水の硬度について調べてみると、和風だしや煮物、緑茶などは軟水が合い、コーヒー、スープ、シチューには硬水が合うというように、硬度により適した飲み物・料理があるとのこと。普段台所に立つことのない私には新鮮な情報でしたが、料理の好きな方には常識なのでしょうか。これを機に少しは台所に立って、硬度の「違いがわかる男」を目指してみようかと思います。

ニュースレター第10号では、進行中の大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の報告を中心に、LACRCの活動をお伝えしてまいります。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENECの進捗状況	2
活動報告	5
コラム	6

PRENECの進捗状況

LACRCのメインミッションであるPRENECの最新情報をお伝えいたします。このプロジェクトは、第5州のバルパライソ、第12州のプンタ・アレナスにおいて、それぞれ年間3,000人、サンティアゴにおいて10,000人を対象とした免疫学的便潜血反応検査（以下、iFOBT）を計画しています。PRENECは、中南米諸国にも広がっており、現在エクアドル、パラグアイにてプロジェクト実施に向けて取り組みが始まっています。

一周年を迎えたプンタアレナスにおけるPRENEC



1º Jornadas Programa Prevención Neoplasias Colorrectales **PRENEC Magallanes** HOSPITAL CLINICO MAGALLANES

2010年より、東京医科歯科大学、CLC、チリ保健省が実施してきた「大腸癌早期診断プロジェクトPROYECTO DE PREVENCIÓN DE NEOPLASIA COLORRECTAL(PRENEC)」のサテライトプロジェクトである、第12州・プンタアレナスにおけるPRENECが開始してから1年が経過しました。

本年7月5日に、プンタアレナスのマガジャネス病院においてPRENECの一周年記念式典が開催され、PRENECに参画しているLACRCスタッフ、CLC代表団、マガジャネス州保健局の面々が参加しました。

式典では、会場に集まった多くの聴衆の前で一年間のPRENECから得られた良好な成果が報告され、またこのプロジェクトの将来的な展望についても報告されました。今まではマガジャネス州保健局からの助成金（自治体レベル）で行われていたPRENECですが、今後はチリ保健省の資本により国家レベルでプロジェクトを進めていく方針となったことも報告されました。

また、各専門分野の医師、看護師らにより、プンタアレナスPRENECの1年間を総括する各種発表が行われました。

LACRCからは河内講師（病理担当）が「PRENECにおける病理医の役割」というスペイン語でのプレゼンテーションを担当し、出席者から大好評を得ました。

今後も、LACRCスタッフと東京医科歯科大学はプンタアレナスにおけるPRENECへの支援を継続してまいります。



マガジャネス病院PRENECスタッフとの記念撮影



プレゼンテーションをする河内講師

サンティアゴにおけるPRENECの開始記念式典

本年5月にサンティアゴにおけるPRENECが、本学、CLC、チリ保健省の監督の下、正式にスタートいたしました。7月12日にプロジェクト開始を記念した「大腸癌を予防しよう！」キャンペーンの式典がPRENEC実施施設であるCESFAM(地域の保健所)で開催され、チリ保健省より招待されたLACRCスタッフも参加いたしました。式典においては、プロジェクトのリーダーであるCLC大腸肛門科責任者・フランシスコ・ロペス医師が現在までのPRENECの進捗状況を報告し、その実績を踏まえ、サンティアゴで実施されるプロジェクトの重要性を説明しました。

また、チリ保健省オルランドー・ドゥーラン健康管理局長がPRENECを支援しているメンバーに対する感謝の意を述べるとともに、PRENECに関する条件を満たす対象者が、CESFAMにおけるPRENECプログラムに多く参加することへの期待を表明しました。

本プロジェクトでは、今後大腸癌の早期発見を目的に、50歳から75歳までの無症状の参加者に対し、約16,000人を目標に免疫学的便潜血検査(iFOBT)が無料で実施される予定です。



PRENECの進捗状況を報告するロペス医師



サンティアゴPRENECスタッフと



壇上に立つ小林助教



記念式典に参加したLACRCスタッフ

CLC・パラグアイ保健省との3者協定締結

大腸癌による死亡率の増加を懸念するパラグアイ政府は、昨年より、本学とCLCが共同で実施してきた大腸癌早期診断プロジェクトPRENECに興味を示しており、本年6月6日に東京医科歯科大学、CLC、パラグアイ保健省との間に「大腸癌早期診断プロジェクトの実施のための協定」を締結しました。

LACRCの河内講師、CLCのグレベCEO、プロジェクトのリーダーであるフランシスコ・ロペス医師からなるチリ訪問団が、6月5日から7日まで、パラグアイ共和国に滞在し、アルボ保健福祉省大臣、在パラグアイ日本大使館およびJICA/パラグアイ支所の代表、パラグアイの保健当局と共にパラグアイの首都アスンシオンにあるデ・ルケ国立病院で開催された調印式に参加しました。

また、調印式におけるスピーチでは、アルボ保健福祉省大臣がパラグアイにおけるPRENECは、拠点となるデ・ルケ病院だけでなく、イタウグアー国立病院、国立大学病院、軍隊病院等といった施設でも実行される予定で、パラグアイにおける大腸癌死亡率低下に向けて今後も参加病院を拡大していく予定であると述べました。また、プロジェクトの開始に先駆け、本年9月に、パラグアイ拠点の内視鏡医、看護師、秘書、技師からなるチームが、CLCのロペス医師、クロンバーグ医師らが指導する各分野ごとの講習会を受講する予定です。同講習会では、CLCのボンセ看護師によるPRENEC共通データベースの運用手順についての講習も行われる予定です。

本学は、パラグアイ保健省とCLCの協力の下、このプロジェクトを学術的・技術的に支援してまいります。



パラグアイに広がるPRENECネットワーク



協定書に署名するパラグアイ保健大臣(中)・CLCのグレベCEO(右)



パラグアイ保健省癌予防部門責任者アルバレンガ医師と



協定書を受け取る河内講師

活動報告

第2回チリ・エクアドル腫瘍学シンポジウムに参加

LACRCスタッフとCLC訪問団は、6月27日及び28日にエクアドルの首都キトで開催されたSECOND CHILEAN-ECUADORIAN SYMPOSIUM ON ONCOLOGYに参加しました。このシンポジウムは、エクアドルの第一警察病院とCLCのCANCER CLINIC CENTERが共同で主催したもので、LACRCからは河内講師および岡田助教が講師として参加しました。

シンポジウムでは、河内講師が「早期胃癌の肉眼的、病理組織学的分類」と「病理組織学的所見に基づく早期大腸癌の治療方針」、岡田助教が「胃癌の内視鏡診断と治療」と「大腸癌の内視鏡診断と治療」というそれぞれ2題の講演を行い、いずれも好評のうちに終了致しました。

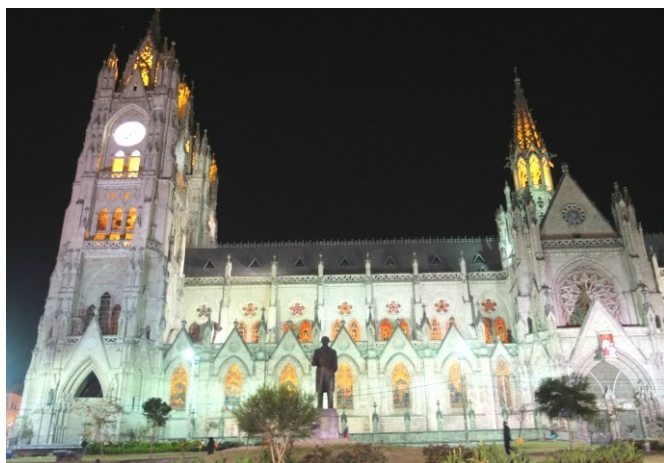
エクアドルでは、シンポジウムに参加したほか、河内講師と岡田助教が、ロベス医師らとともにキトのパブロ・アルトゥーロ・スアレス国立病院及び第一警察病院を訪問しました。現在では、エクアドルにおける大腸癌スクリーニングプロジェクトのために、LACRCスタッフを中心とした学術・技術支援や、研修コースの実施等に取り組んでおります。



シンポジウムのポスター



講演をする岡田助教



キトのバシリカ教会



パブロ・アルトゥーロ・スアレス国立病院の病理検査室にて

★コラム★ “甦ったカルメネール”

突然ですが、みなさんチリの3Wをご存知ですか？諸説ありますがWeather、Wine、Women（Wifeという方も！）がチリの3大“いいところ”だそうです。残念ながら女性である私は最後のWの良さは男性ほど実感できませんが、前者2つは存分に堪能しております。今回はその3Wのうちの一つ、チリワインについてお届け致します。

チリワインの特徴は、安くて高品質であることです。価格帯は1000-10000ペソ（200-2000円）と様々ですが、どのワインを飲んでもハズレがなくおいしい。特にCarménèreカルメネールというぶどう品種で作られた赤ワインは、チリを代表するものでバランスのいい味わいでとてもおいしい。プロによると、“メルローより華やかでほのかにスパイシー。カベルネ・ソーヴィニヨンのような芯の強いタンニンがあり、より優しいテクスチャー”。んー。とにかくおいしい。チリの文化を学ぶ上で重要な位置を占めるこのワイン。私も日々勉強（晩酌）に励んでおります。

実はこのカルメネール。とても興味深い歴史を辿った品種なのです。そのワインの特徴的な濃い色調と、葉の色から“Carmin（深紅）”を語源とするこのぶどうは、古くボルドーに由来し、17世紀初頭から19世紀にかけて最も広く栽培されていた品種でした。しかし1867年にフランスを襲ったフィロセキアという害虫被害により他のワイン用ぶどう品種と同様に壊滅的打撃を受けます。もともと雨に弱く病弱な種であったカルメネールは、この被害によってフランスでは失われた品種とされていきました。この歴史が覆されたのが約130年後のこと。1994年フランスのモンペリエ研究所ワイン学教授のジャン・ミシェル・ブルージク博士が、チリでメルローの亜種として栽培されていた品種がこの失われたカルメネールであることをDNA鑑定によって明らかにしました。1850年代にチリにわたったカルメネールが、年間300日以上が快晴で降水量の少ない気候と、フィロセキア被害に未だ襲われたことのない土地で100年以上元気に栽培されていたのです。単一品種として見直されたこのチリのカルメネールは、2008年に『カーサ・ラポストール・クロ・アパルタ』が米国雑誌ワイン・スペクテイターで年間1位を獲得し、一躍世界的ブームを迎えることになりました。

チリの燦々とふりそそぐ太陽の光と大地に育まれ、100年以上を経てワイン界に甦ったカルメネール。歴史に思いを馳せていただく

ワインはさらに味わい深く、おいしいものです。皆さんも機会があれば、カルメネールをぜひご笑味ください。

今後も定期的にコラムを掲載する予定です。またワインコラムをお届けできるよう、日々勉強に励む所存でおります。（小林真季）



サンティアゴ近郊ワイナリー「コンチャイトロ」のカルメネール

編集後記

LACRCオフィスに勤務し始めてから、3ヶ月が経ちました。徐々に仕事に慣れてきている気がいたします。LACRCオフィスで過ごした期間は、約3か月間という短いものですが、PRENECプロジェクトを支援して下さる様々な方とお会いすることができ、またLACRCの先生方より多くのことを学ぶ機会に恵まれました。今後とも、このLACRCのニュースレターを通じて、LACRCオフィスの最新近況をご報告してまいりますので、引き続き、ご愛読の程宜しく願いいたします。（ウレホラ・ハイメ）

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 10, July 2013

〔発行日〕 2013年7月31日
〔制作〕 Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: jurrejola@clc.cl